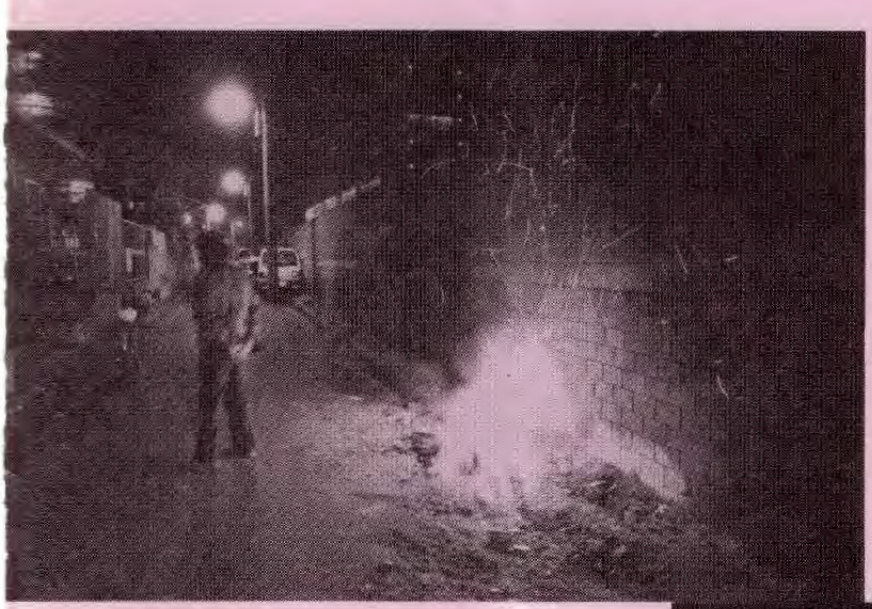
路上から撃て

山谷92－93 越年・越冬人民パトロール報告集



空前のアブレ地獄の中、使い捨てられ
野たれ死にを強いられている仲間
今我々は何を見、何をすべきなのか？

山谷 浅草 上野 池袋 馬場 新宿 渋谷
300 200 120 50 50 300 13
都下1、000名を越えるアオカンの仲間は今……

発行・山谷92-93 越年・越冬闘争実行委員会
人民パトロール班

山谷争議団　東京都台東区日本堤2-28-7　☎03-3872-7081

山谷労働者福祉会館
医療室（人パト班）　東京都台東区日本堤1-25-1　☎03-3876-1641

［目　次］

はじめに …… 2

山谷内人パトの報告 越年前段、越年闘争期 …… 4

銅像堀概況報告 …… 16

汐入概況報告 …… 17

上野人パトの報告 越年前段、越年闘争期 …… 18

越年期浅草人パト報告 …… 27

越年期池袋人パト報告 …… 31

越年期高田馬場人パト報告 …… 33

越年期新宿人パト報告 …… 35

越年期渋谷人パト報告 …… 38

山谷内人パトの報告 越冬後段 …… 39

センターの宿泊援護とアオカンの仲間 …… 42

上野人パトの報告 越冬後段 …… 47

アオカン（野宿）を強いられている労働者の類型化について（試論） …… 53

おわりに …… 56

はじめに

この報告集は、'92－93山谷越年・越冬闘争に於ける人民パトロール班（以下、人パト班）の報告集として、毎週土曜日に山谷労働者福祉会館（以下、「会館」）を拠点とした「会館」人パトを担う、医療委人パト班プラス山谷争議団メンバーによってまとめられた。

時と処を限られた人パト活動の中で出会えたアオカン（野宿）を強いられる山谷労働者の一側面が記録されている。当初、編集にあたって、アオカンを強いられる労働者の姿を、声を、どの様に盛り込むかが討議されたが、結論からいえば、我々の力量不足によって、そのことは果たされなかった。

我々は、アオカンの根拠には、手配師 ── 飯場制度に象徴される労務供給体制がある、と考えている。労務供給体制に組み込まれた労働者にとって、アオカンは常態である。山谷争議団結成期に提起された不況期の戦術環としての「半タコ・ケタオチ戦」のなかでアオカンは、半タコ支配の還流の中で位置付けられてきた。

アブレ（失業）地獄のなかアオカン ── 半タコ・ケタオチ飯場 ── トンコ ── アオカン ── ケタオチ飯場、あるいは狩り込みで病院・施設 ── トンコ、という支配と、その支配を強いられた労働者の姿態としてのアオカン、ここに人パト活動を通して切り込み、労働相談を掘り起こしてゆく、あるいは保安処分の罠を撃ってゆくというのが、人パト活動の位置付けであった。

支配の還流を強いられる一人一人の労働者にとってアオカンは"野垂れ死"の入口でもある。労働者は一人一人、固有の出自と来歴をもち、支配を文字どおり一身に背おっている。アオカン ── 野垂れ死という固有の労働者が背おわされる"もの"といかに向きあうか、という課題の前に、人パト班は右往左往しているのが現状だ。

現在、我々はよく「通年層」という言葉を使う。アオカンが一時の状態ではなく、幾年も続けてアオカンを強いられている労働者のことだ。昔から寄せ場を経由する労働者と、ダンボール住居、地見屋等の街頭生活者は近しい存在であった。いわゆる寄せ場労働者の高齢化のなかで、アオカン＝街頭生活者化が進行している。街頭生活者は、都市化（都市 ── 農村関係）という固有の歴史性と根拠をもっている。この労働者の姿態変化は当然にも寄せ場そのものを変容させてきている（横浜・寿では周辺地域のオバステ山化が進行している、という）。一般的に、スラム街に於いては30年で世代交代を果すというけれど、寄せ場労働者は己れのうちに再生産の条件をもっていない（たしかに、福祉 ── 病院・施設は労働者にとって、選別 ── 再商品化の機構であり、帝国主義そのものが不断に労働者として産み出すものではあるが、それは、此処ではなく、どこかだ！）。

戦後、50年代に形成された現代寄せ場が、90年代に突入した時、当然にも、この国の高度成長期を担った寄せ場労働者は、アオカン＝街頭生活者 ── 野垂れ死の局面を一身に背おわされてきて、当然にも広域化が進行している。リヤカーを家屋に改造したり、ブルーシート貼りの家は、街頭生活者の象徴でもあったが、寄せ場周辺で急増してきている。人パトで出会うアオカン生活者との切り結びが問われ、そこに医療が重要課題となってきているのだ。

現在の「会館人パト」は、「医療人パト※」を基本にしている。いずれにせよ人パトの基本は、労働者との出会いにある、と考えているからだ。それを「会館」の人パトと云うのは、「会館」の位置付けにもかかわるものであり、我々は現在、「会館」に係わる人達との討議を望んでいる。

その意味で、この報告集は、「会館」に連なる人達に向けた報告集と考えていただいていい。何らかの意味でこの報告集にひっかかりを感じた人、その人は「会館」に連なる人である。まず我々はこの「会館」の陣形を整え、同時に、アオカン ── 野垂れ死を強いられる労働者と正面から向きあってゆく。**「黙って野垂れ死ぬな！」**

※「医療」人パトといっても、我々が出会った労働者に医療を施すというのではなく、「会館」一階医療室に引き継ぎ、月曜日にセンター・福祉へとつなぐ、ということ。
アブレ地獄の強まりのなかで昨年より、炊き出し＋「医療」人パトという形態をとっている。

山谷内人パトの報告

＜１＞越冬前段（12月期）

毎週土曜日の通年人民パトロール（以下人パト）を、山谷内と上野の２コースに別れて行っている人パト班は、12月より越冬体制の取り組みを開始した。とは言っても、実際には週一度の体制を拡大することはできず、集中した陣形と支援者への呼びかけの強化として実践を行っていった。

12月からを越冬体制として集中する根拠として

①まず、冬将軍の本格的な到来が、アオカン（野宿）を強いられる仲間に対して、文字通りの野垂れ死攻撃として襲いかかる現実。とりわけても、昨年来の空前の不況の中で、矛盾を一身に背おわされる仲間の現実と向き合い、野垂れ死を許さない闘いの真価が求められる時期であること。

②都の山谷越冬対策の第一弾である『潮見寮』が、12月１日から開設され、病気のため通院が必要な仲間と、高齢で「越冬期のみ宿泊保護を必要とする」仲間への収容を開始する。　行政の「生かさず、ひっそりと殺していく」野垂れ死攻撃との対決が迫られていく。

③目前に迫る、越年越冬闘争に向け、山谷労働者・支援の強固な人パト体制が求められ、その構築にむけた実践が問われていく時期であること。

私たちは、通年人パトの蓄積を生かし、増加の一途をたどるアオカン者の実態の把握と、仲間の声を汲み上げていく話し込み―聞き取り活動に取り組んできた。

夜の８時に会館を出発し、おおむね11時くらいまでには終了するわずか３時間余りの中で、出会った仲間の数、姿、顔つきなどに注意を払い感じてきたこと、話し込みで明らかになった様々な実態（就労、行政の動き、地域からの追い出し、中高校生らの差別襲撃など）は、列挙すればきりがないほどの膨大な量となっている。その膨大な資料―蓄積の中から、今年の特徴的な事柄をまとめ、肌で感じてきたことをすこしでも伝わるようにしていきたいというのがこの報告の主旨である。

人パト班としても、さらに十分な討議が求められているが、各地で寄せ場の運動に身を寄せる人々にも、問題提起として受け止めていってもらいたい。

以下、12月期の人パトの報告と、越年期の現状について報告である。

(1)　12月期の青カン者の数

	12/5	12/12	12/19	12/26
玉姫公園	３２	３５	３５	５０
神社	６	１０	１５	１８
清川小公園	４	３	５	９
職安	２４	２４	１４	２８
石浜公園	２	１	４	３
あさひ通り	２４	２９	１６	２６
日本堤公園	８	７	１２	１１
吉原公園	７	４	５	４
いろは通り	１４	１８	９	５
センター前	３	２	１０	１１
橋	０	０	２	０
計	１２４	１３１	１２３	１６５

注）実際のアオカン者の数と、人パトの記録として残される数とは大きな差がある。というのは、玉姫公園の数を見れば歴然とするのだが、炊き出しを求めて公園に集まってくる仲間が、昨年から増え続け多い時には玉姫公園だけで１００食を越える時もあった。実際の玉姫公園でのアオカン者は、10数名であり、炊き出しを食べたあと、山谷内外の寝ぐらに移動する仲間が多いこと。

さらに、玉姫公園で出会った仲間と、他の公園で出くわす事もしょっちゅうあり、数が重複することになっている。

どれくらいの数が重複しているのかは、今のところ不明。数の記録としては、炊き出しの食数を記録として残している。

② 数値から見えてきたこと、ならびに12月期の評価

＜山谷内でのアオカンの実態の概括＞

山谷地区内でアオカンを余儀なくされている仲間は、実数では１００人～１５０人と考えられる。大きな数の変動の理由の第一は、山谷で生活しながら、寝る場所は浅草・隅田公園・上野と周辺地域にまで広がっていることがあげられる。その理由としてよく聞くのが「山谷は物騒だ。モガキにやられる」「良い寝場所がない、もっといい場所を知っている」などの声だ。確かに、通年的なアオカン体制をとって生活できる場所が山谷には少ない。汐入や銅像堀公園のように、段ボールやリヤカーできっちりと寝ぐらを確保している仲間は、山谷内にはまずいない。毛布を公園の茂みの中に隠したり、あるいは抱えまま昼の間を過ごし、夜は馴染みの場所でアオカンをする。今日は山谷、明日は浅草と流動する。上野では、最近山谷の仲間の顔をよく見かけるようになった。

理由の第二に、一で見た流動するアオカンの実態から見て、行政の収容政策や仕事の出具合によって、数が大幅に上下する性格をもっていることだ。別表でみる「アオカン者数とセンター宿泊数の対比」を見れば、『宿泊数を増やせば山谷内のアオカン者数が減る』現実をはっきりと見ることができる。仕事が出て、多くの仲間が出張に行ける条件になれば、当然に青カン者の数は下がるであろう。その意味からも「景気と政策に直結する」山谷のアオカン者の実態として見ることができる。

その他もちろん、天候（雨）、炊き出しの曜日などにも数は左右される。

・山谷内アオカン者の層について

通年アオカン層（通年的にアオカンをして生活している仲間―病気や高齢のため全く仕事につけないか、労働意欲をそぎ落とされてしまっている。当然、体もガタガタになり入院歴も数回あるが、途中でトンコするか、追い出されてまた元のアオカン生活に戻ってしまう）が圧倒的な率を占める。が、昨年から仕事バッグを枕にして、毛布もかけずにアオカンする仲間と出会うことが多くなってきた。服装からも、すぐにでも仕事に行ける体制であることがすぐに分る。話を聞くと「飯場から帰ってきて、しばらくはドヤに泊まっていたが、金を使い果たし、ここ数日アオカン。明日にでも仕事があれば飯場に入りたい」と言う。飯場から飯場を渡り歩き、その中継点として寄せ場に立ち戻り、次の仕事が見つかるまで寄せ場で生活するが、長期化するに伴ってアオカンを余儀なくされる。この飯場層・現役層のアオカン者が増えてきたことが、最近の特徴である。年も60歳に至らない程であろう。

当然に話し込む内容も、体のことよりも、仕事のことが主となっていく。

「行きつけの飯場があったが、最近は不景気でなかなか行けない。行っても飯場で『今日は休んでくれ』と、何日も休まされる。10日の満期をやってくるのには、20日以上ないととても無理。休んだ日の食事代はきっちり取られるからたまったもんじゃない」

「当然、満期で帰ってきても、５～６万の金しか残らない。一週間あればなくなるさ」　「やむなく新聞手配で仕事に行ったが、あれは当りはずれがあるね。広告通りの条件はあまりない。駅手配はもっとひどいもんだ」

そして、「仕事さえあれば、いつだってバリバリ仕事をできるのにな」

人パトの中では、今まであまり聞かれなかった労働者の声だ。

・高齢者の就労実態

山谷に限らず、各地寄せ場で蔓延している「顔づけと直行化」によって、高齢者・病弱者は大きな打撃を受けている。通年アオカン層の仲間が仕事につくことは、実際の問題として非常に困難で、朝の寄せ場に立

ってもまず現金の声はかからないと言ってもいい状態だ。こうした中、アオカンの高齢者が仕事に行くためには、①早朝手配と呼ばれる、３時前後から人を上げに来るケタ落ちの業者を捜す、②職安の白手帳を頼りに、月に３回程しか回ってこない東京都の特出しの仕事につく、③センターの「高齢者窓口」を頼りとする — だが実態的には、「高齢者でも使ってやるぞ」という代物であり、軽作業とはかけ離れたもので、ほとんど「窓口」の体をなしていない。

「顔づけと直行化」は言うに及ばず、今「年齢制限」問題が直撃している。職安・センター共に、55才ないしは50才の年齢制限を敷き、就労機会をことごとく奪い去っている。　ここに、アオカンの根拠が就労問題と直結していることが明らかである。

ちなみに、職安の手帳締めつけは、「アブレの不正受給摘発」に止まらず、60歳以上の労働者には手帳を発行しない、本手帳から仮手帳にきり変えさせ、あげくに取り上げるなどの攻撃を繰り返している。（仮手帳ではアブレも貰えないばかりか、年末のモチ代も支給されない。）公共の機関が率先して高齢者をアオカン—野垂れ死の淵に叩きこんでいる。

＜越冬前段—12月の実態と評価＞

12月のアオカン者数は、１３０～１６０人となり、前月の11月の１７０人前後とは大きく減っている。仕事が出たとは言えない現状の中、行政の動きがアオカン者の数を減らしたのではないかと推測できる。

週末の宿泊は、例年通りの１００名強である。従って、潮見寮への入寮がかなり大規模に行われたのか。人パトでも、「この前までここにいた仲間は今、潮見に行っている」という声をちらほらだが聞いている。

潮見寮は、東京都が有隣協会に管理委託した準更生施設であり、定員は１７６人、台東区枠で約１３０人、荒川区枠で約４０人となっている。12月１日から３月30日まで開設する越冬対策の施設であるが、長い人でも２ヵ月余りで退寮させられる。今年は、越年後の大田第一寮を潮見寮と同じ位置として扱い、通院必要な人を収容するという事態が起こされた。（後述）

病弱で特に高齢の仲間を潮見寮に収容する目的は、最も野垂れ死の淵に立たされている仲間を収容することによって、山谷内外の路上でバタバタと死んでいくことを防ぎ、施設や病院の中でひっそりと野垂れ死を強いることにある。とにかく野垂れ死の現実を目に触れさせない、その反面、一定程度体力の回復をみて、厳寒の中でのアオカンに耐えられると判断するや、一切のフォローもせずに放りだすのが実態である。

毎年、３月の末には何十人もの潮見寮から出された仲間と出会う。

この潮見寮への収容が、12月の初旬から大規模に行われたとすれば、行政の側が一速く情勢に対応したということであり、また一方で、労働者の側も、２月の初旬には追い出されることを承知で、入寮を希望したということだ。どちらの側からも、せっぱ詰まった状況がみて取れる。

アオカン者にとって、冬をいかに越していくかは最大の問題であり、「今年はどこかに入院して、春先になったらでてくるか」とか「どこかの飯場にもぐりこんで、居すわってやろう」とか、したたかにいろいろと考えているものだ。

不況によってアオカンから簡単に脱却できない状況が、労働者の動きを敏感にさせ、情勢に身構える姿勢を取らせている。苦境の中で不屈に根強く生き抜いてきたアオカン者の知恵が、したたかに生きる力が感じられてきた。

危機感によって、仲間の動きを速める状態は、年末の大田寮受け付けに端的に見てとることができる。

＜２＞越年闘争期（12／28～１／４）

越年期の人民パトロールは、以下２点の要素によって、通年期とは全く異なる現実を生み出す。 ①玉姫公園での越年越冬闘争が取り組まれ、労働者にとっての生きていく三要素―医・食・住が、医療活動・炊き出し・アオカン野営地として玉姫に集中する、②都の越冬対策の第二弾として、12月29日から７泊８日の大田寮への収容を実施する。

結果としては、玉姫公園に残って争議団・越冬実と共に、アオカンで年を越した仲間は約１５０人、大田寮への宿泊に行った労働者が1960人、どちらにも行かずに山谷内でアオカンして年を越した仲間が以下に列記する山谷内アオン者の数である。

① 越年期のアオカン者の数

	12／28	29	30	31	1／1	2	4	
清川小公園	8	4	4	4	5	6	6	玉姫・23
職安	22	14	10	14	11	11	20	神社・８
石浜公園	4	4	0	0	1	0	0	
あさひ通り	22	5	1	0	1	4	12	
日本堤公園	11	8	8	6	6	6	6	
吉原公園	9	7	5	5	7	5	5	
いろは通り	14	5	2	0	1	5	21	
センター前	12	3	1	0	0	0	4	
橋	1	0	1	0	0	0	0	
計	103	50	32	29	32	37	105	

（１月３日の記録は、資料紛失のため詳細不明だが、概ね30人前後は変わらない）

・大井収容所（大田寮）受付・入寮状況

	12／29	12／30	12／31	計
受付総数	1177	568	273	2018
入寮者数	1152	556	252	1960

今年度の数値と、それ以前２年間の、各日にちごとの受付け数と入寮者数は、別項の資料にて詳しく分析。総数が毎年約２５０人ずつ増えていることと、ことしは29日に一番殺到したことがわかる。要参照 ――

②全体状況から見た入パト

・前述のように、越年期の山谷内人パトを分析する際、その前提として①大井収容所政策の概要と実施結果、②玉姫公園で年を越す仲間の状態、について踏まえなければならない。

・大井収容所政策

都・山谷対策室は、越年期に大田区城南島の埋立て地に、３棟のプレハブの寮を仮設、最大収容能力1800人を有する巨大な宿泊所をつくりあげる。（公式発表は1050人であるが、食堂と布団部屋を開放し、さらに35人部屋に50人を詰め込むことによって、1800以上の収容が可能となる）

入寮希望者は、12月29日から31日までの３日間に山谷の近くに設けられる受付けにいけば、入寮の日から

７泊８日の宿泊をすることができる。基本的には、越年期の山谷治安対策として、労働者を山谷から遠く離れた大井に隔離収容する政策としてあるが、通年的なセンターの宿泊と違い、受付けまで行けば１００％確実に入寮することができること（病院のトンコ歴・センターからの借金の未返済等の「問題」にかかわらず）無料で８日間を過ごすことができることなどの「魅力」から、アオカン者のみならず、ベッド式ドヤで生活する労働者も多く入寮を希望する結果となっている。

山対室は「大田寮に宿泊できるのは、山谷で生活をしている者、あるいは山谷で生活をしていたことがある者」と、山谷労働者に限った宿泊施設である建て前をとってはいるが、近年は、都内で生活する者であれば（新宿であれ、池袋であれ、馬場であれ）受け入れをしている。この結果、上野・浅草はもちろん、都内各地からも大田寮への入寮を希望して山谷に集まってくる現象を生みだしている。

80年代前半の大田寮は、「働ける者が年を越して、また現場に戻っていくことが出来るための施設」として、露骨に病弱者・高齢者に「お前は福祉にいけ」と除外してきたが、近年の政策は、「希望者を全員入寮させる、選別しない」方針に変わってきているのだ。

むしろ積極的にアオカン者を入寮―収容しようとしている姿勢は、昨年までには無かった以下２つの事例によって明らかになっている。

①―29日の前日から、センターが窓口となって大田寮入寮受付けを開始 ――

今年度は、高齢者（基本は55歳以上と聞いている）に限り、前日からセンターで受付けを開始、29日からの受付けを通さずに直接大田寮への入寮を可能にする体制をしいたことがあった。どれくらいの仲間が、前日からの受付けをしたかの実数は分らないが、事実越冬期間中に「これを28日にセンターから渡された」と、大田寮の宿泊券を持っていた労働者がいた。この体制がどれくらいの規模でしかれたのか、私たちも後手の対応に追われ、実態を掌握するまでには至っていない。

②―浜松町でアオカンしていた仲間にポリ公が大田寮にいくことを指示 ――

越年期間中に明らかになったことであるが、浜松町でアオカンしていた労働者が、ポリ公に「年末どこか泊まるところはないか」と聞いたところ、「ここに行け」と大田寮に行くことを指示していたという。おまけに、受付け場所である第四瑞光小学校までの行き方を書いた地図を手渡された。山谷からはかなり離れた場所であり、しかも青カン者の集まる場所としては定着していない浜松町という場所で警察官が指示したということは、都の政策として、警察とも手を組んだ連携プレーとして考えるべきであろう。

そもそも山谷対策室は、都知事・警視庁長官・消防長長官をトップにすえた機関であるから、連携も容易である。

昨年度には、高田馬場の原町福祉事務所において、「年末は山谷にいけば泊まる場所がある」と、福祉事務所が自らの責任を放棄し、大井収容政策を全面に打ち出した姿が明らかにはなったが、ポリの動員は今年が初めてだ。

付言ではあるが、受付け場所が従来の台東区リバースポーツセンターから、荒川区の第四瑞光小学校に変わったが、「地域住民の声」―年末一時金（もち代）の支給時と大井受付け時と２回も地域に山谷労働者が集まってくるのは困るという声に応え、荒川区に移したという建て前であったが、それ以外の特別な根拠についてはみることができなかった。

山対室は12月中旬に、「不況の中で、どれくらいのアオカン者が生み出されているのかは掌握できていない。今年は1950くらいの入寮希望者がでると見ている。根拠は一昨年と昨年との比較で２５０人の増加、昨年の1700人に２５０を足したのが1950という数だ」と、実態的な根拠を持たずに数を試算していることを表明していた。さらに「大田寮で1800人、その他の緊泊施設で１００、合せて1900人までは受け入れられる。パンクはしない」と豪語していた。さて蓋を開けてみて実際はどうであったのだろうか。

前出の一覧表の数を振り返り、その実態について概括していきたい。

・大井収容政策の結果

12月29日から３日間にわたる入寮受付を通し、実際に入寮した労働者の総数は1960人となり、過去最高の数となった。受付数と入寮数の差（マイナス数値）は、受付けはしたが長い時間待たされて、しびれをきらして途中で帰ってきた数と分析、入寮を断られたケースは無かったと把握している。

果たして、山対室の打ち出した1950くらいだろうという数字は、どんぴしゃりの数に収まったと言える。ここまでピッタリと収まってしまうのは、山対室の試算が、はっきりとした根拠―都内のアオカン者の数、生活実態、その流動性等について、一定の把握ができているからではないのか。

大田寮へ行く労働者は概括して

①山谷内外の通年的なアオカン層で、行政の施策に敏感でいち早く動く労働者たち

②普段はドヤで生活しながら、越年期はドヤ代を浮かせるために大井へ行く労働者

この部分については、センターの通年的な宿泊実態の把握から、ある程度の試算は可能となるはずである。

③飯場での就労を基本とするが、年末には閉められて追い出される飯場から山谷に戻っ　てきて、大井へいく労働者

この部分については、飯場が閉まるかどうかによって大きく左右される。センターは11月から飯場の調査を行い、「年末どうするのか」を聞いて回っていた事実がある。これは大井収容政策をいかに押し進めていくのかの資料集めとしてあったのではないか。

ここまで掌握することができれば、数の試算は可能だ。

唯一、試算よりも数を増加させる要因は、駅を中心にアオカンする労働者に対して、越冬人パト班が働きかけ、大井への道筋をつくることである。しかし、駅でアオカンする仲間は駅周辺での生活のパターンを確固としてつくりあげていて、食糧、寝場所の確保、仲間との関係などにおいて、たとえ一週間であろうとも離れることができない状態となっている場合が多い。例えば、自分が行けばコンビニから賞味期限切れの弁当を貰うことができるが、他の人では駄目、あるいは他の人にそのルートを取られてしまう、などの理由で、容易には駅―生活の場から離れようとはしない。

今越冬闘争では、広域人パトで積極的に大井への呼びかけをしなかったこともあり、結果的に言えば、山対室の試算通りに収まったとも言えるだろう。

他の寄せ場には見られない、希望者全員を収容する都の越冬対策は、そのふところの深さを見せつけられる。そしてそれ以上に、センター―山対室の日雇労働者への現状把握と管理・収容政策は、私たちの数段先を見通していることをはっきりと認めねばならない。

秋からの越冬陣形の構築の中で、是非とも教訓化していかねばならない点である。

また、３日間の日にちごとの入寮者数は、初日の29日には1152人と前年度比で30％の増加をみたが、２日目の30日は 566人と前年度比１、８％の減少、３日目の31日は 252人と同じく０・４％の減少をみた。総数では1960人と前年の1705人に比べ15％の増加を示したわけだが、とりわけても初日に多くの労働者が大田寮の宿泊に殺到したことが分る。

不況と失業―アブレ地獄の只中で、「今年は大田寮が満杯になって、遅れると宿泊できないかもしれない」という危機感から、労働者の動きを早めた結果として見ることができる。馬場や新宿からも、28日夜には玉姫に来て、翌日の大田寮受付けにそなえていた数人の仲間とも出会った。

・大井収容所の様子

越年期間中、越冬実としても収容所への体制的な取り組みができておらず、その様子については、労働者の声からうかがい知るしか手立てはない。

12月31日の山谷人パトで、既に大井から出てきた仲間と出会った。

「今年の大井はすしづめの状態で、一部屋に50人は入れられている。ストーブの回りは暑くて寝られない。風呂は芋をあらうよう。めしのおかわりができない。とにかく不満が噴出している」と、待遇の劣悪化が語られた。

1月2日、3日と争議団・越冬実は、大田寮へのビラ入れともちつき大会を行った。わずか一時間余りの話し込みしかできなかったが、直ちに改善要求行動が求められるほどの状態ではなかったと判断している。

②玉姫公園で年を越す仲間の状態

越年期を大井に行かずに、玉姫で年を越す仲間の数は、 150人程であった。昼間は100 人を切るが、炊き出しの時間になると 200人以上に増え、夜から朝にかけて青カンで過ごす仲間が 150人という数字である。

※参考資料── 玉姫公園での炊き出し数

	28	29	30	31	1	2	3	4
朝		220	218	242	180	187	218	260
昼		220	185	196	214	266	296	
夜	444	291	321	230	338	357	407	

食数は玉姫でアオカンする仲間、ドヤから食いに出てくる仲間、山谷地区内外から来る仲間の数の総数と見てとれる。

400食を越えたのは28日と3日の2回だけ、これは大井との関係でとらえることができる。

玉姫公園には、日を追うに従って「大井には行くつもりもない」アオカン者が残っていくことになる。大井受付けの最終日を翌日に控えた30日の夕方に、公園内の43人の労働者に聞いたところ、30人が「行くつもりもない」と答え、「明日行く」はわずかに8人であった。これが31日になると、ほぼ 100%が「大井には行くつもりも無かった」となる。

1月2日に公園で労働者9人に聞き込みをした結果は以下の通りであった。

・通年アオカン　会館周辺　大井行くつもりない　たまに出張にいく　35歳

・通年アオカン　あさひ通り　友達とケンカした　大井は行くつもりだった
　年明けは5日から仕事が決まっている　飯を食わせてくれる仲間はいる

・アオカン1年　あさひ通り　腰を手術してから仕事にいけない　センターも駄目　45歳

・たまにアオカン　飯場―山谷―釜ヵ崎を転々　金が無くなればアオカン
　4日以降は大阪にいくつもり

・通年アオカン　日通　白手帳で東京都の仕事は必ず行く　他の仕事はほとんど行けない
　3年前大田寮で職員をブン殴り、留置所に3日間入れられた。それ以降大井には行かない。

・通年アオカン　大井に行くくらいならアオカンのほうがよい　あまり話したくない

・飯場とアオカン　浅草　月に15日くらい出張に行く　山谷で駄目なら馬場
（月15日も仕事に行ってアオカンを強いられる、駅手配とアオカンの繰り返しの典型）

・飯場とアオカン　浅草から仕事　山谷からも行く　白手帳は持っている

・飯場かリヤカーでアオカン　大井は手続きがめんどうくさい　年明けはリヤカーで、夜働いて、昼は寝る

食うだけで一杯　アオカンしかない

公園内では、例年よりも酒の本数が目立ち、酔っている仲間が多かった。

山谷内は平穏な雰囲気の中で、例年通りの年越しという状態であった。

③越年期山谷内人パトの評価

以上の①②で見てきた状況の中、山谷内でアオカンする仲間の実態はどうであったのか。　一言でいえば、大井にも玉姫にも行かずにアオカンする仲間の数は例年通りの30前後を推移していくこととなった。昨年度との比較で大きな違いは、28日の人パトで出会ったアオカン者の数である。昨年度は52人だが、今年度は 103人と倍増した。（別項資料参照）通年的なアオカン者の増大からも見てとれるが、アオカンを強いられる労働者が倍増していることを示すものではないか。

そして、越冬２日目の29日には50人と半減、30日には32人にまで減少する。実際に人パトで回ると、毛布や布団が置かれたまま、中には人がいない抜け殻のような状態が非常に目につく。この減少した数は、大井へ行った労働者の数と見て間違いなかろう。

単純に計算すれば、７割の労働者が大井へ行ったことになる。

特に、28日の人パトであさひ通りで出会った労働者は、寝る体制もとらず、明日は大井に行くんだと待ち構えている様子であり、実際22人が翌日には５人にまで減る。29日以降、同じ場所に同じ顔ぶれの仲間がアオカンしているという状態が続き、「例年通りの山谷だな」と感じている最中に、山谷内外で労働者が死んだという報告が入ってきた。

・２人の労働者の死

・12月31日、一人の労働者が「石浜公園で一人死んだらしい」と報告をしてくれた。

話しによると、朝８時頃石浜公園から、白い布を顔に被せられた人を、ワゴン車に乗せていったということであった。石浜公園は人パトでも一日２回まわるコースであり、当日朝３時からの人パトでも、２人のアオカン者を確認している。この２人のうちどちらかの労働者が亡くなったとしか考えられない。緊急状態を確認するためには、寝入っている労働者を起こして確認していくしかない制限された現場の対応のため、毛布をかぶったまま緊急状態を引き起こしていても対処できない現状が、一人の仲間の死を放置してしまった。

今までは、寝息を確認するとか、イビキをかいて寝ていれば大丈夫とか判断の材料としてきたが、この方法もアオカン者にとっては迷惑なこともあり、現場対応だけでない、もっと根本的な「野垂れ死を許さない」体制が求められていることを示した。

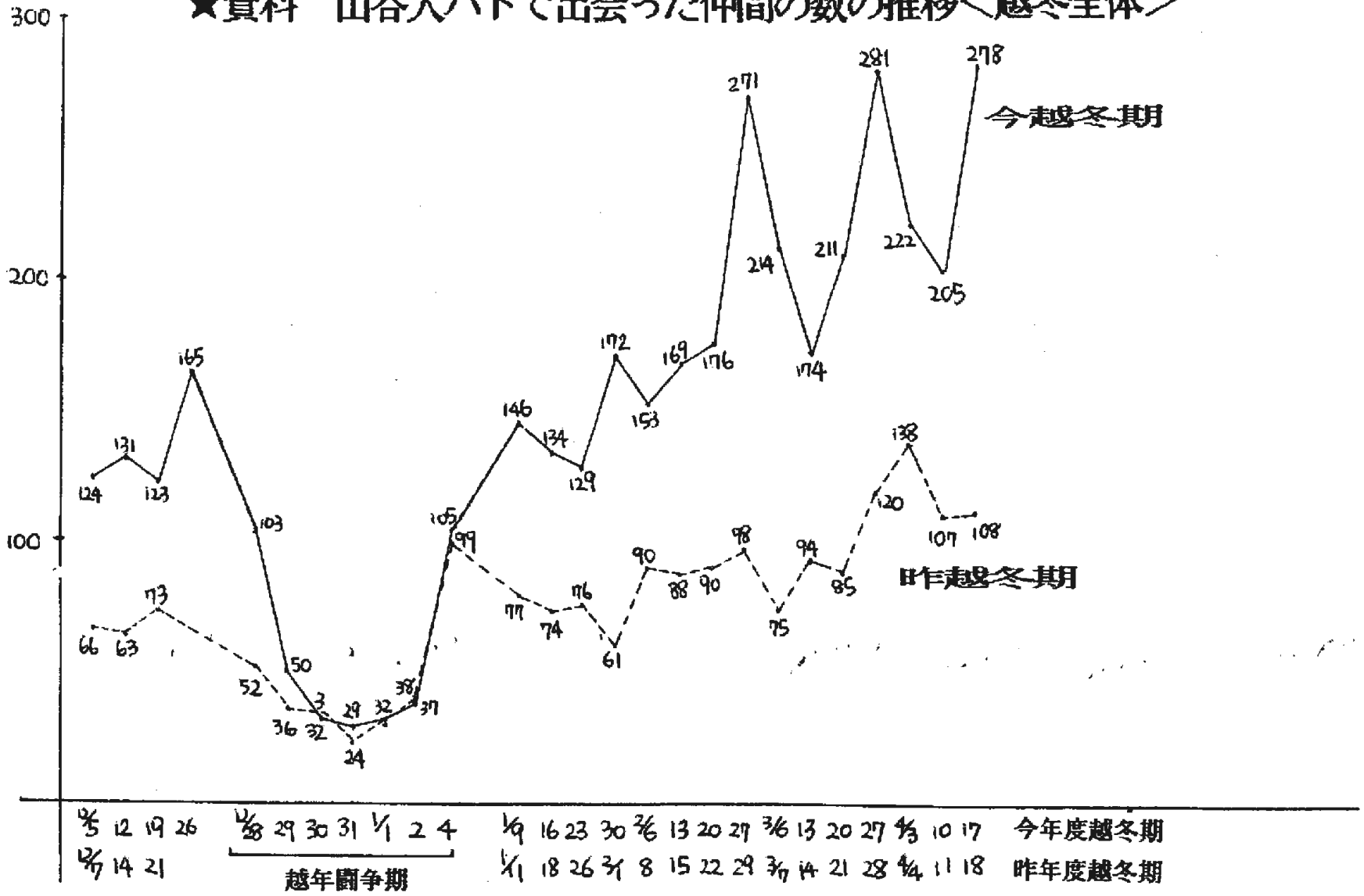
この問題は、今後の人パトの中で議論の深化が求められる。

・１月に入ってから、山統労の人パトで、すでに死亡しているところを発見した事実があった。

場所は、私たちのコースから離れた「太陽マンション」の駐車場であった。この駐車場は、雨をしのげる場所としてアオカンするには適している。数名の労働者がアオカンをしていた。この問題は、私たちが山谷周辺の体制的な取り組みができていなかったとはいえ、アオカン者の集まる場所が次々に生みだされる現実に無頓着であったことだ。日常的に人パトのコース以外にもアオカン者の集まる場所に注意を払わなくてはならない。

山谷人パト報告・文責H

★資料　山谷人パトで出会った仲間の数の推移<越冬全体>



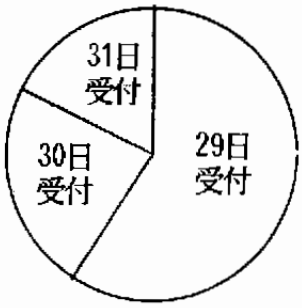
★大井収容者の受け付け状況

		1990年	1991年（前年度比）	1992年（前年度比）
29日	受付総数	709	920（＋29.8%）	1.177（＋28.0%）
	入寮者数	693	886（＋27.8%）	1.152（＋30.0%）
30日	受付総数	534	582（＋ 9.0%）	568（△ 2.4%）
	入寮者数	505	566（＋12.1%）	556（△ 1.8%）
31日	受付総数	308	268（△13.0%）	273（＋ 1.9%）
	入寮者数	291	253（△13.1%）	252（△ 0.4%）
計	受付総数	1.551	1.770（＋14.1%）	2.018（＋14.0%）
	入寮者数	1.481	1.705（＋15.1%）	1.960（＋15.0%）

＊29日の受付総数÷全受付総数×100

1990年	45.7%
1991年	52.0%（＋6.3）
1992年	58.3%（＋6.3）

＊92年受付日別の比率



★越年山谷人パト前年度比較

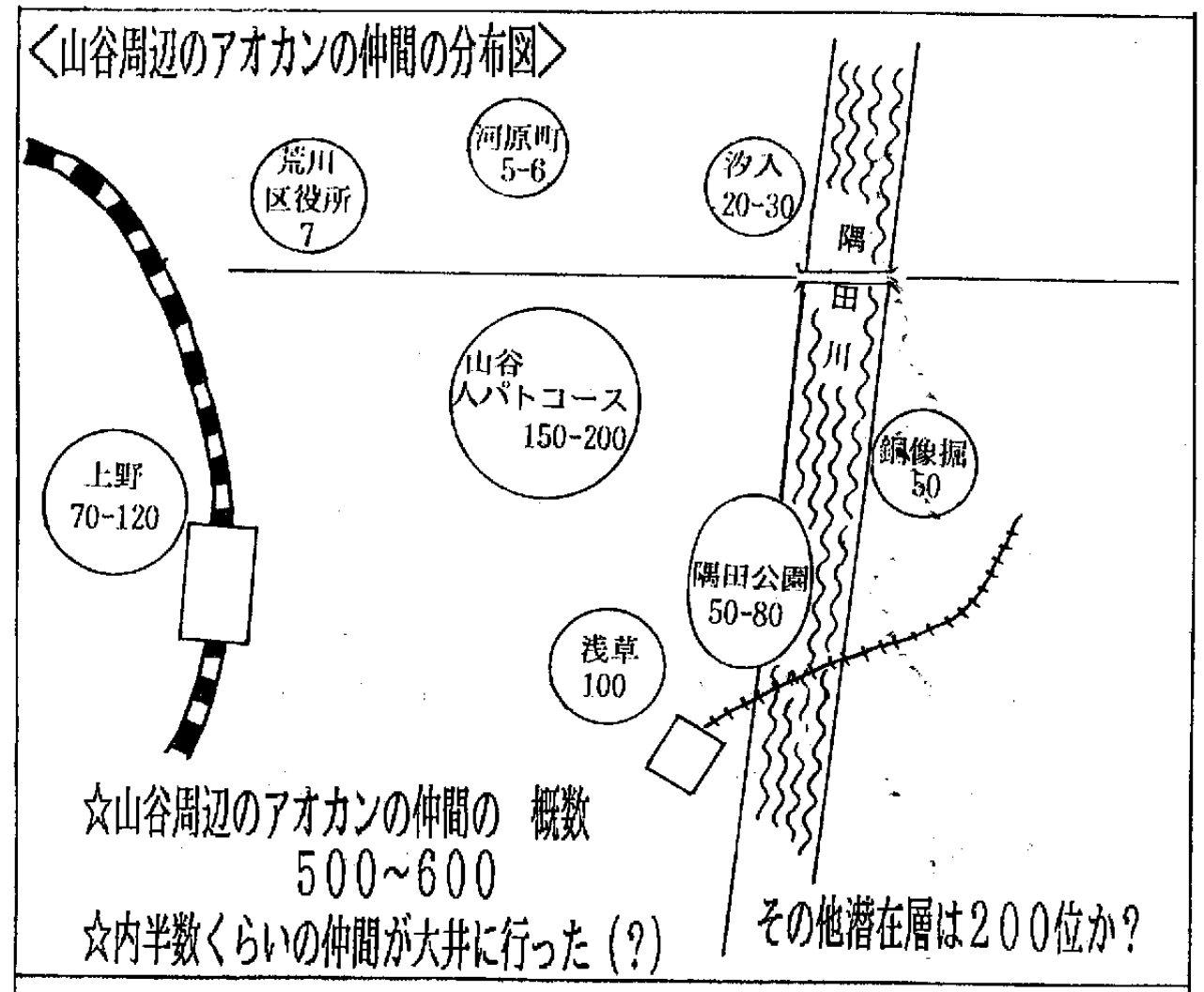
	91-92 越年 山谷(8h-)	92-93 越年 山谷(8h-)
12.28	52	103 (+51)
12.29	36	50 (+14)
12.30	34	32 (△2)
12.31	24	29 (+5)
1.1	32	32 (±0)
1.2	38(12h-)	37 (△1)
1.3	38(12h-)	
1.4	概要不明	105
1.5	75	

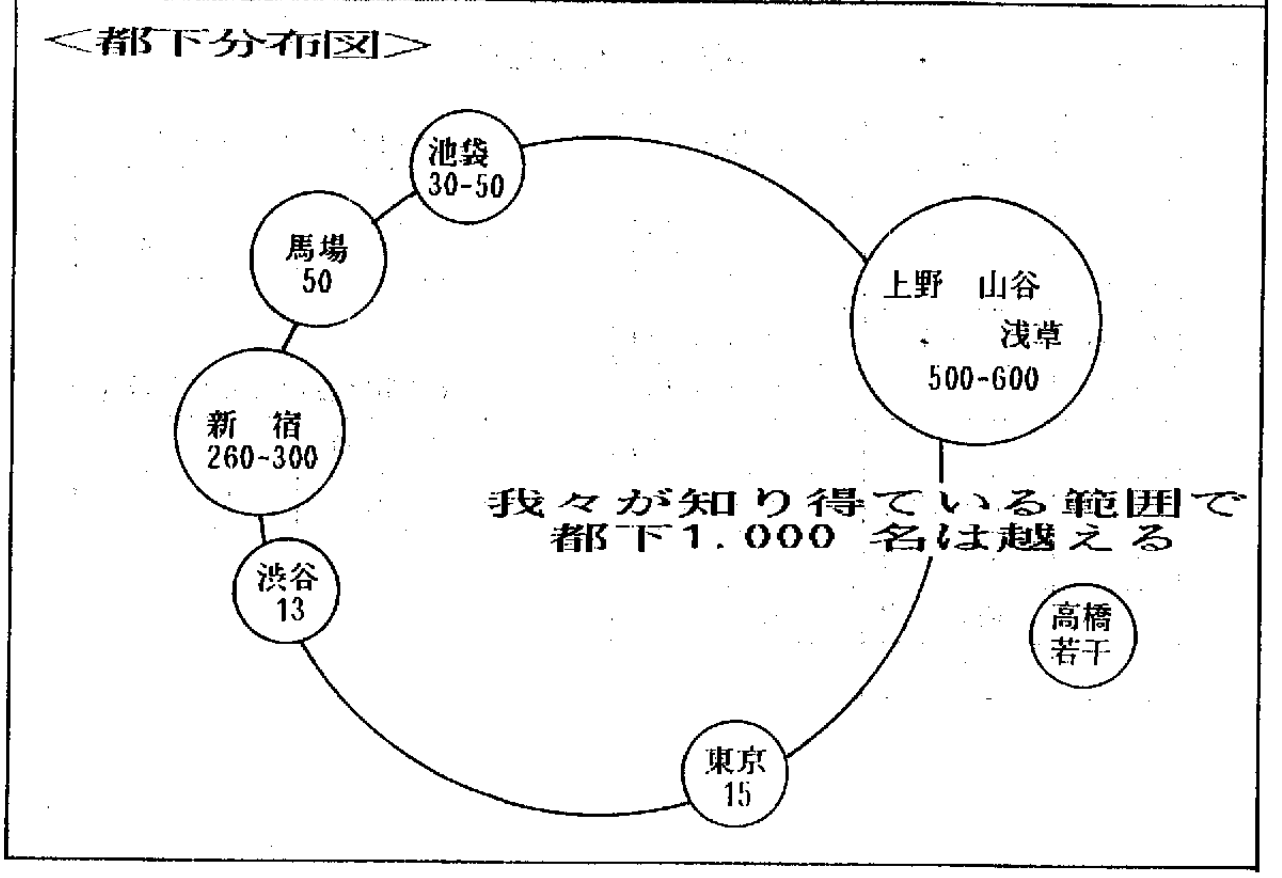
＊越年前最後の人パト数比較

91.12.21	73
92.12.26	165(+92)

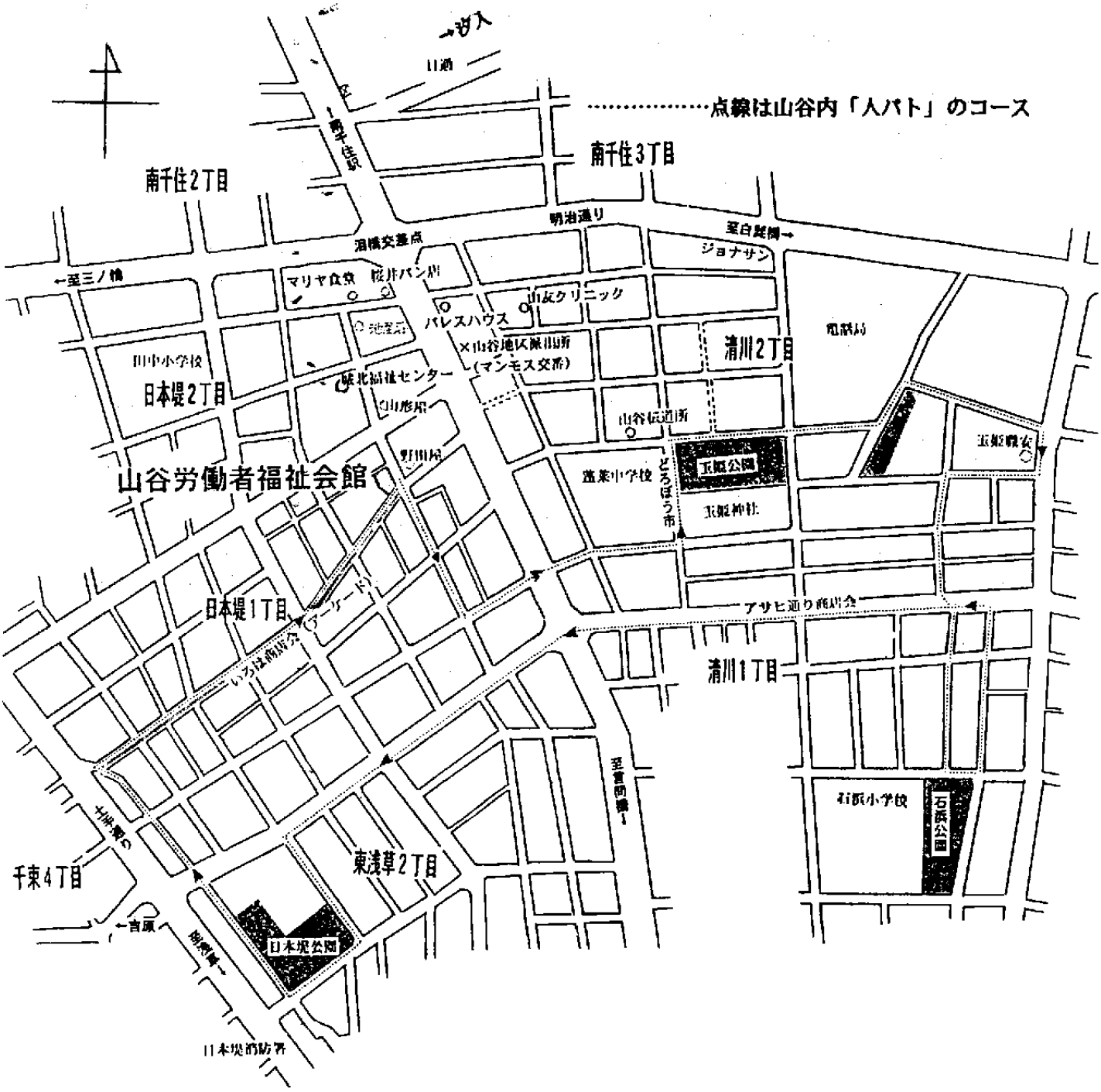
＊越年明け最初の人パト数比較

92.1.11	77
93.1.9	140(+63)


＜山谷周辺のアオカンの仲間の分布図＞
荒川
区役所
7
河原町
5-6
汐入
20-30
隅
田
川
山谷
人パトコース
150-200
銅像掘
50
上野
70-120
隅田公園
50-80
浅草
100
☆山谷周辺のアオカンの仲間の　概数
500~600
☆内半数くらいの仲間が大井に行った（?）
その他潜在層は２００位か？


＜都下分布図＞
池袋
30-50
馬場
50
上野　山谷
浅草
500-600
新　宿
260-300
我々が知り得ている範囲で
都下1.000 名は越える
渋谷
13
高橋
若干
東京
15

山谷周辺図


……点線は山谷内「人パト」のコース
南千住2丁目
南千住3丁目
南千住駅
明治通り
泪橋交差点
←至三ノ輪
マリヤ食堂
桜井パン屋
パレスハウス
山友クリニック
×山谷地区派出所
(マンモス交番)
清川2丁目
田中小学校
日本堤2丁目
東北福祉センター
山形屋
山谷伝道所
山谷労働者福祉会館
野田屋
蓮葉中学校
玉姫公園
玉姫神社
どろぼう市
日本堤1丁目
アサヒ通り商店会
清川1丁目
至言問橋
石浜小学校
石浜公園
千束4丁目
東浅草2丁目
日本堤公園
日本堤消防署

銅像堀概況報告

山谷からちょっと離れるが、隅田川に沿い、白鬚橋と桜橋とにはさまれて銅像堀公園という長細い公園がある。上を見上げると首都高速道路が走っており、雨のしのぎやすいこの公園には、墨田区プール体育館などその付近も含めて毎日40～50人もの労働者がアオカンしている。ほとんどの労働者がダンボールでていねいに「小屋」をつくり、もう「そこに住んでいる」といった感じ。犬を飼っている労働者もいる。大部分は「現金層」のれっきとした現役労働者である。昨年3月、ある労働者の小屋から出火、高速道路までモウモウと煙がたちこめるほどの大火事になり（幸い火傷人はでなかったようだが）、以来この近辺には「立入禁止」のロープが張られ、一時多くの労働者が汐入へ移動した。が10月頃からボチボチと戻りはじめ、また新たにやってきた労働者もおり、いまでは以前よりアオカン者の人数が増えているぐらいだ。もちろん墨田区・公園課がこれを黙ってみているわけもなく、ほぼ月1回のペースで「警告撤去」を強行している（事前に労働者の小屋に「○月○日までにブツを撤去しろ、じゃないと撤去するぞ！」という内容の警告書をはりつけ、当日清掃車を送り込む、といったもの）。が銅像堀の労働者は「撤去のときだけ小屋を移動すればアトはだいじょうぶ」と笑う。撤去に対抗し、移動しやすいようナント車両付きの小屋に住んでいる労働者も何人かいる。それも、みなペンキできれいに塗装してある！銅像堀でしたたかに生きる労働者の姿がよくイメージできる話だと思う。またこのあたりは、夏になると隅田川・花火大会の見物客でにぎわうところでもあり、例年花火大会が近づいてくると、大会実行委、墨田区・本所署がパトロールにより労働者の追い出しにかかってくるが、こちらも仲間にとっては「それがどうかしたのか？」という感じか。むしろ怖いのは少年の襲撃だ。ある仲間はこういっている。「自転車に乗った小学生5～6人のグループが、昼間よくこのへんまでやってきて、石をブン投げてくるんだ。なかにはダンボールの小屋がかたむくぐらいおもいきり投げてくるヤツもいる。銅像堀の近所の小学生というわけでもなく、入谷とか、けっこう離れたところからきてるみたい」少年によるアオカン者襲撃にストップを！

（文責・N）

汐入概況報告

やはり隅田川沿い、水神大橋のあたりが荒川区・汐入である。汐入公園とそのまわりには30台以上のリヤカー（あるいはダンボール小屋）がたちならび、計40人ちかくの労働者がそこで生活している。汐入の労働者の大部分は、いまも山谷から仕事にいっているというわけではなく、またべつの仕事をもっている。たとえば北千住の足立市場ででる「残飯」をあつめてきたり、そのへんに捨てられているガスコンロをみつけてきて解体し、まだつかえる部品だけをとりだして業者に売るといった仕事である。もちろんもともとはれっきとした山谷の労働者なのだが。

南千住署、荒川区・公園課もことあるごとに汐入までやってきて、なんとか労働者を追い出そうと躍起である。昨年4月、汐入のすぐちかく、ＪＲ隅田貨物駅でアオカンしていた労働者が火事をだし、トラック5台が焼けるほどの大惨事となったが、その直後も南千住署のポリが汐入まできて 、火事の件で労働者からききこみをしてまわり、1人1人名前、本籍などを確認していったという。あげくのはてには「おまえらみたいな連中がいるから4月のときのような火事がおきるんだ！」。 またやはり4月中旬、汐入とは川向こうの東京都立向島リハビリセンターに天皇アキヒトが「慰問 」のためやってきたときなどは、汐入公園にパトカー数台がピタッとはりつき、四六時中労働者を監視していたそうだ。当時、ある仲間はこんな話をしてくれた。「おれたちだってこうして仲間3 人で助けあい、一生懸命生活しているんだ。おれたちのくらしぶりを天皇にも見せてやりたかったよ」ちなみにこの仲間、「昔ちょっと事情があって」両足をひざから下にかけてなくしていた ── 。そして昨年来、荒川区公園課も労働者の追い出しに本腰をいれはじめている。 8月、労働者のリヤカーが集中していた隅田川と汐入公園のあいだの小道を金網でおおってしまったのだ。今年 3月 には汐入公園のまんまえに都立航空高専の新校舎が完成し、4月からは学生のいききも激しくなる。汐入での労働者の追い出しをめぐる彼我の攻防は、いっそう余断をゆるさないものとなっている。

（文責・N）

上野人パトの報告

＜１＞越年前段（12月期）

上野は浅草と並び山谷の周辺部としての一角を占めている。山谷からわずか 2kmの位置で、多少時間はかかるが徒歩でも行き来可能である。また交通機関もＪＲ、地下鉄、バスが運行しており、山谷から都心部に行く最初の通過駅でもある。

上野駅は東北本線、常磐線の終着駅であることからして東北地方と結ぶ密接な関係があり、「東の玄関」としての機能を歴史的に有している。近年は新幹線の乗り入れなど、東北や東関東から首都圏を結ぶ巨大なターミナル駅としての位置がますます大きくなっている。駅構造は山手線各ターミナル駅と比較してかなり古く、その関係で駅ビルの工事計画が現在進んでいる。ＪＲの管轄地の駅地下道は一本だけであり、これを起点として京成、地下鉄（日比谷線、銀座線）の地下道につながっている。この地下道は終電が走り抜ける夜の12時過ぎから朝 4時台の始発の時間までシャッターが閉められる。京成や、地下鉄の地下道まで含めれば地下道はかなりの長さにはなるが、基本的には古い作りの狭い地下通路であり、通勤時間帯などは人がひしめき足早に抜けていくような地下道である。アオカンを強いられている上野の仲間はとりわけ冬の時期はこの地下道の隅に身をかがめて寒さを凌いでいる。ＪＲ地下道が比較的広く、利用客が少ないこともあり、仲間はこの周辺に多い。また階段の隅や、柱の影などにも仲間の姿が見うけられる。

地上にあがってみると、かなり造りの大きい広小路口の駅舎ないしその周辺にも仲間の姿がちらほらといる。トイレの前とかコインロッカーの前、駅の建物の隅など。夏などはここで酒盛りをしている仲間とよく出会う。駅周辺ではその他、浅草口から入谷口を結ぶ屋根のある地上通路、入谷口のすぐそばにある岩倉高校の正門前、新聞集配所の前にある映画館の軒下などがアオカン場所として選ばれている。

上野駅のすぐ西側に、都下でも一、二を争う公園である上野公園がある。ここには東京都文化会館や、国立博物館などの文化施設が建ち並び、また動物園や、不忍池など行楽施設が多いため、とりわけ土日には行楽客がドッと押しかけてくる。「公園にいると一歩もここから出なくても生活していけるよ」と冗談で言われているように、大量の残飯や、煙草の吸殻を行楽客は残していく。樹木や建物が多いため冬でも公園を寝ぐらにしている仲間は多い。夏になると駅の仲間も合流して広い公園のなかあちこちに仲間が分散する。広すぎるため我々でも把握出来ないくらいに散らばって行く。公園のなかで京成上野駅から西郷像にかけての空間はイラン人の溜り場である。京成駅の構内から追い出されたイランの仲間は公園に登る階段の付近に夕方ころから集り、情報交換や仲間との交流を深めている。

上野駅の南側、御徒町にかけてはアメ横など繁華街が続く。アメ横の商店街はバリケードをはってアオカンが出来ないが、深夜の松坂屋やオフィスビルの風当りのない場所には仲間の姿が見うけられる。終電が出た後、地下道から追い出された仲間は近くの電話ボックスの中や、繁華街の中にねぐらを移し散らばっていく。食糧確保の上でも店が終ってから出す売れ残りを求めてこの繁華街には仲間が集まる。

毎週土曜日の通年人パトを山谷と上野の２コースで我々は行なって来た。上野に関しては91-92 越冬時がピークであった京成上野駅、上野公園に集まる多くのイラン人出稼ぎ労働者との関係性が現実的なポイントとして重視せざる得ない状況のなか、半分のウエイトはそちらの方に向いていた（コースも当初は地下道～京成口と上野公園内は回わらなかった）。「外国人労働者と連帯しよう」「まず出会いから始めよう」我々として何が出来るかを確定出来ないなか、半分はそんな自然発生的な思いから上野人パトの通年化が開始された。

その中で我々が出くわした問題と、状況の変化は多岐にわたっている。まずイラン人労働者からの現実的な大

量の要求、追い出し問題、労働相談、医療相談などと、すぐさまこれに対応出来る体制と、人パト班としての独自の方針をもってないこと。結果対応に追われてしまい、花見シーズンから本格化した地域、警察、入管、公園課による巧妙なイラン人の上野公園からの追い出しに関しては、何の力にもなれなかったこと。現在、不況の進行とも相俟って上野でのイラン人の数は減少を辿っているが、イランの仲間に対して我々が山谷から人パトで回わっていく位置付けがいまだ確定しきれていないこと。人パト班でかかえこめないような領域設定をするのではなく、現実の問題を他団体とも協力しあって可能な限り対応しようというのが現在のスタンスではあるが……

また、上野でアオカンしている仲間が現実に置かれている状況に対してのとらえ返しも、とりわけ 3月 5日のＪＲ職員によるアオカン者虐殺事件以降、問われて来た。この事件に対する弾劾行動を行なうと共に、上野の仲間の動向をより注意していく姿勢が遅まきながら培われて来たともいえる。また暖かくなってから地下道から分散した仲間を追いかけることもしなければならなかった。定点炊き出しではなく、パトロールなのであるから仲間のいる所に出むかねばならない。その結果駅地下道、駅周辺、そして上野公園を横断するといったかなりな距離のコースが一応は確定した。その結果話し込みの時間が短くなるなどの弊害も共に背追った訳であるが。

上野人パトを通年化していく中で、出会った問題や課題はその他様々にある。それでも現下のアブレ地獄の中、様々な矛盾が寄せ場や駅の日雇の仲間に襲いかかっている現状において、そのポイントともなる駅の仲間、駅に流入してくる仲間との出会いを保証していく人パトを一年間行なって来たことによって、山谷にとじこもっているだけでは分からない多くの事がらが判明した。人パトを線として山谷と周辺駅とをささやかであるが定期的に結んでいることから我々が得たものは大きい。

この報告は今越冬期上野人パトで出会った多くの仲間の声を積み重ね、この我々が得た、上野の今年の特徴や仲間の動向をまとめたものである。

①　12月期の上野でのアオカンの仲間の数

	12/ 5	12/12	12/19	12/26	平均
地下道	45	43	55	49	48
浅草口	0	0			
入谷口	2	5	3	10	
岩倉高校	0	0	0	1	
外通路				3	
広小路	3				
駅周辺	1				
映画館前	1	2	1		
駅周辺数	52	50	59	63	56
文化会館	6	5	5	5	
美術館	1				
博物館	2		2	1	
サイクリング		7	2	5	
ベンチ		3	3	4	
噴水周辺	1	4		1	
その他					
公園周辺数	10	19	12	16	17
合計数	62	69	71	79	70

②　数値から見えてきたこと ならびに12月期の評価

上記した通り上野人パトのコースはこの一年で大きく変わって来ている。図表にあるようなコースがほぼ確定

したのは最近のことであり、定着したのはこの12月の時期である。それでもこの時期は公園内の例えばサイクリングセンターや池の端の仲間とは出会えていなかった。そもそもアオカンの仲間は人目につきにくい場所でアオカンする訳だから、なかなか素人ではどこでアオカンしているかなどは分からない。仲間が「あそこにも大勢いるから回わってくれよ」などの声でようやく出会えるという按配である。その結果コースも回を深めるうちに変わり、多くの仲間と出会えることになる。また地下道での数は、人パトの定着のなか、公園の仲間が炊き出しを目当てにその時間だけ地下道に来ることになり、実質地下道でアオカンしている仲間の数をストレートに反映はしていない。秋口頃から上野の仲間内で定着してきたようだ。また地下道で炊き出しを食べてから公園に戻り、再び人パト隊と出会う仲間もいる。その数は重複して数えられるので全体の合計数も実数より増えていることは間違いない。どれくらいの重複があるかといえばおおよそ10～15前後ではないかと思われる。しかし、我々が回われていない場所が上野公園内にはかなりあることからして合計数以上のアオカンの仲間がいることはほぼ推測できる。それがどれだけの数になるかはまだ分からない。仲間によれば「200 は優にいるよ」ということだが。

以上のことを考慮した上で、我々の調査方法による数値で以下統一させてもらうことにする。

12月期は平均70前後でほぼ一定した仲間の数が記録されている。地下道や公園での仲間の数も大きな変動もない。資料は載せていないが、11月期もだいたい同じように70前後で推移していることから、仲間の移動は当然あるものの、ほぼ一定数の変動を保っていたことが分かる。この70前後という数は昨年の越冬期での上野人パトで出会った仲間の平均値が43人（コースの違いを抜きにするという前提で）ということを見れば、約倍増ということになる。

この時期上野のアオカンの仲間の層規定という問題意識が稀薄であったため、どのような仲間が多かったかということは確定できないが、ほぼ同じ顔ぶれが毎週地下道に集り、また公園の中でも同じ人が毎週寝ているという観が強かった。そこから見て通年的に上野を拠点にしてアオカンをしている仲間が多数ではなかったかと推測出来る。当然仲間の中には駅手配の飯場から出てきた仲間や、仕事は山谷から行っている仲間もいたが、それが大きな層をなしているという実感はあまり感じられなかった。

次に越年期前の上野の状況を簡単に列記してみよう。

11月18日狩り込み　38名が目蒲病院に
12月22日狩り込み　7名が目蒲病院に

11月 7日前後　ＪＲ地下道に植木10本が設置
11月14日前後　植木の数が22本になり、濡れたジュータンが通路両脇に設置
11月21日前後　上野公園京成階段上の緑地植栽工事が開始、工事フェンスがたてられ、ベンチ９つが使用不可能に

11月16日　入管、イラン人の摘発。40人前後が摘発（未確認）
11月26日　日本テレビ「進め電波少年」上野公園でイラン人を集め、ペルシャ語のチラシ配布
12月22日前後　警察による上野公園のイラン人に対する荷物の撤去。数度にわたり。（未確認）

12月31日　ＪＲ終日運転、地下道シャッター閉められず。
〃　午後８時頃地下鉄銀座線改札付近で、地下鉄職員がジョウロで水撒き。
ＪＲ地下道の追い出しはAM 8時、10時、PM 4時。ＪＲ職員数名で。

例年上野でのアオカンの仲間の追い出しが強まるのはこの越年期前と花見シーズン前である。狩り込みに関しては別に述べるが、ＪＲ地下道での植木や濡れジュータンの設置など陰険な手段による追い出しが目立っているのが特徴であろう。 3月 5日の仲間虐殺以降、社会問題化をさせまいと露骨な追い出しの手段に変わって来ていることがうかがえる。もっとも植木や濡れジュータンなどは、そんなのに構わず仲間はその前で寝ているからその分通路が狭くなっただけのことだが。しかもそもそも通行量が少ない地下道であるからして通行人も「迷惑」がる程のことでもない。一方上野公園のイラン人に対する摘発や荷物の撤去が入管、警察、公園課が三身一体となりかなり強化して来ているのが大きな特徴と言えるだろう。

これら、例年強まることが予想された仲間の追い出しに対して、行政や警察などの動向を把握していくことが12月期越年前段の大きな柱であった。その点での聞き取りの強化のなか12月19日の人パト時に狩り込みの話があり、その情報をもとに監視活動を行ったのが、次のレポートである。狩り込みの実態について、仲間の口からはよく聞くのであるが、どのような形態で行なっているのか等かなり不明な点があった。深夜に行なう事と、実施日を福祉は秘密にするため、人パト班での実際の監視は今回が初めてである。ようやく狩り込みの現場までたどりついたという段階ではあるが、これまでの人パトでの積み重ねが、上野の仲間の実態から行政の対応までをも実際に問題にし得る所までいきついたということであると思う。

③　上野狩り込み（「街頭相談」）監視リポート

12月19日上野人パト時に仲間から情報があり、人パト班３名で監視活動を実施した。

日　　時ー92年12月22日　（開始時刻は不明）AM 1時すぎ発見～ 2時25分終了
場　　所ー上野公園内
　☆コース（発見）西洋美術館西側サイクリングコース～文化会館周辺～南側をまわり道ぞいの雑木林周辺～レストラン、西郷像下～噴水周辺～並木道を北上～動物園前まで行き、Ｕターン～不忍池東側（池の端）～映画館裏あたりで終了
人　　員ー発見時　台東区腕章つけた者 7、作業員 3、警察官 1
　　終了時　　〃　　20、〃　3、〃　2
作業車両　収容車（ホロ付きトラック）浅草運送（ｋ）のもの　ー 1
　　清掃車（ゴミ収集車）　　東京都のもの　　ー 1
　　小形のゴミ運搬車（職員の移動にも使用）公園のものー 1（最終的には 2）
収容人員　台東区役所前での監視から
　　公園班　5名（博物館１、サイクリング１、文化会館１、その他）
　　その他（どこの班かは不明）　2名　ホロ付きトラック 3台とゴミ運搬トラック（みすず興業のもの） 1台の車両編成
　　計　7名。　（全て目蒲病院に収容が後に判明）

★実　態　＊懐中電灯をもった警察官、台東区職員数名と小形のゴミ運搬車に乗った職員、作業員が場所を指定する先導役の職員の指示に従い移動、清掃車と収容車はその後を移動し、エンジンをかけたまま停車。
　　あらかじめ、アオカン者のいる場所は調べているらしく作業はテキパキしている。
　　＊アオカン者を見つけると何人もの職員らが懐中電灯を顔に当て、その人の回りをとりかこむ。

一人しかその場所にいないと10名もの職員らがとりかこみ、懐中電灯を容赦なく照らすことになる。

＊その先頭にたっているのは、警察官である。福祉の職員よりも先にアオカン者に「おいおきろ」「ここは寝る場所じゃないゾ」と、本人の同意もなく、ダンボールを無理矢理はぎ取り作業員に持って行かせ、「早くどっかへ行け」と威圧的に言い、その後でダンボールを突然持って行かれ困惑しているアオカン者に、福祉の職員が「体、大丈夫か」「病院いくか？」とおざなりに声をかけるといったもので、病状もなにも聞きはしない。本人が「連れてってくれ」と言わなければ、そのまま深夜の冷えこみのきつい寒空に放置していくというのが実態である。収容された人も何の説明もされずにトラックに入れられ、どこへ行くのかも分からずにひたすら全作業が終了するのをトラックのなかで待っていなければならない。トラックの方は職員などついておらず、委託業者のドライバーのみであり、収容者がトイレにいきたいと要求しても「俺じゃ分からないから…」と無責任な対応しか出来ない。

＊荷物の撤去と追い出しは、警察官と作業員が率先して行なう。荷物の撤去は基本的にダンボールだが、下に敷いてあるダンボールや毛布や荷物に関しては手をつけない。まわりを囲んだ風よけのダンボールや枕元のゴミ類に関しては警察官やその指示を受けた作業員が容赦なくひっぺがし、小形のゴミ運搬車に次々載せていく。小形のゴミ運搬車が一杯になると清掃車に移していく。ただし、撤去は本人といちいち確認している訳ではないので警察官が「ゴミ」と判断したらそれは撤去されてしまうことになる。文化会館の植えこみの下で寝ていた人は、カゴにはいっていた物（何が入っているのか分らないが、おそらく食糧品）全部を捨てられていたようである。

＊西郷像下のイラン人に関しては、警察官が「イラン人か？」と言いながらおこし、顔を確認するや作業員や職員に「こいつはイラン人だ」と告げ、撤去などの対応はしない。

＊こちらの監視に関しては、かなり接近しても警察官や職員は気にも止めない様子で作業を黙々と続けた。西郷像したの階段の所で、上野公園の小野という男がすり寄って来「今年も公園の中でボランティアをやるんですか？やるんだったら教えて下さい」と下手にきいてくる。

★その後のききこみから

＊いつもああいう風な感じなのか？という問に「いつもと変わらないネ」と答える仲間が多数。「昔みたいに引っぱられて車にのせられることないからネ」「追い出そうっても駄目だよ。また来りゃいいんだから。あんなこと何回やっても同じだネ」

＊「福祉の人から病院いくか？と言われたから行くと答えたが、すぐトラックに載せられず、ちょっと待ってと言われた。その福祉の人が離れた場所で携帯電話で話をしているようだったが、戻ってくるや千代田の方にいけと言われ相手にされなかった」

★評　価

＊台東区による「街頭相談」「環境浄化作戦」なるものは、なんらの「保護政策」ともなっておらず、敗戦直後からの狩り込みの形態を継承した、地域からのアオカン労働者追い出しを最大の目的としたものであることが実態として明らかになった。「相談」なるものは威圧的な雰囲気の中で、単に一言声をかけるということであり、状態も確認せずに恣意的な判断で、しかも本人になんらの説明もせずにトラックに積み込むという、およそ人権など無視した強権的な行政行為であ

る。実際「保護」される数は少なく福祉行政の側からは単なるアリバイ行為でしかない。追い出し、野たれ死にの強要を社会的に認知させるがために「福祉」のツラが必要なだけにすぎない。「福祉はやることをやったのだから、あとは自分の責任ですよ。野たれ死ぬのなら勝手に死んでください。ただし出来ることなら他の区で死んでください」という訳である。この行政の無責任な姿勢が地域の排外主義を増長させていることは言をまたない。

＊実態は警察権力が主導となった明確な追い出しである。ダンボールなどの荷物を「ゴミ」とみなし、まったく無断で撤去する。「出ていけ」と恫喝して回る。公園管理権をも逸脱した行為であるにもかかわらず、行政は警察と連携しながらその行為を認知する。今のところは強権発動はまだ最低限におさえているが、国家意思での「収容・隔離政策」が打ちだされれば率先して警察権力が強権発動が出来るよう自治体との連絡・協力体制を現在整え強化しているのではないかと考えられる。

＊今回は 7名の収容であったが、事前に病院を確保せねばならない事からして収容人員の枠が始めから決まっている。どの程度のアオカン労働者なら容認されるかなど治安管理、地域との関係などでの判断をするのは当然警察権力であろう（行政は判断資料をもちあわせていない）。治安管理を優先させ、「保護」なるものは二の次という共通認識のもと、行政も警察権力と密に協力し合いこの枠設定を行なっている筈である。

＜２＞越年闘争期（12/28 ～1/4）

アブレ地獄が一段と深刻化するなか、アオカンを強いられる労働者が山谷のみならず都下全域に散りばまされている現実を見すえ、玉姫越年闘争が行われている期間中その息吹を分散させられている仲間に伝え、とりわけてもアブレと差別と分断のなか就労の機会を奪われ、アオカンせざるを得ない状況に叩き込まれいるアオカン層労働者の反撃と団結形成へむけたたたかいの萌芽を、ひとつひとつの出会いから形成していくこと。炊きだしという契機から、アオカン層労働者のおかれている様々な現状を運動主体として学び把握し、そして共にたたかっていこうとする関係性を培っていくこと。そうした位置づけのもと越年期の上野人パトを取り組んだ。

(1) 越年期の上野でのアオカンの仲間の数

	12/28	12/30	12/31	1/2	1/3	平均
地下道	34	30	41	61	55	44
浅草通り					15	
人谷通り	6	3	2	7	5	
駅周辺			14	13	1	
倉高	3	3	3	4	4	
映画館	2	2	1	1	0	
駅周辺数	45	38	61	86	66	59
文化会館	8	5	8		／	
博物館	4	2	2	2	／	
サイクリング		6	4	3	／	
西郷像周辺		3	4	3	／	
鶯水周辺		2	3		1	
池の端	2	4	0		／	
	／	／	／	5	／	
公園周辺数	14	22	21	13	／	18
合計数	59	60	82	99	／	75
玉姫合流	11	18	1		計	30

(2) 数値から見えてきたこと

1月 3日の公園内の数は、当日のポイントを地下道での聞き取りの強化としたため回わっておらず、未調査である。玉姫合流は人パト班の呼びかけで玉姫公園に我々と一緒に行った仲間の数である。その多くは大田寮への入寮希望者である。

前記したように越年期前の上野人パトで出会った仲間の数は大幅な増減はほとんどなく、平均70＋10前後で推移していた。

上野土曜人パトの定着のなか土曜日の夜になると駅周辺や公園の一部の仲間も地下道に集りそこで炊き出しを食い、それからそれぞれの場所に分散するというスタイルになっているので地下道の数が一つの基準となる。この地下道での仲間の数が12月の四回の平均で48人である。

この数が越年期においていかに変化したのかがポイントとなる。

越年期の数だけを見ると平均値の比較では地下道で△ 4、駅周辺で＋ 3、公園周辺で＋ 1、合計で＋ 5と、増減は小幅である。

しかし、越年期の狩り込みや、大田寮への移動などを考慮するとこの数の意味は違って見える。12月22日の狩り込みで我々が把握しているのは 7名、大田寮への移動に関してはどれだけの仲間が移動したのかは不明であるが、人パトを通して玉姫に合流した仲間は計30名である。少なくとも計37名以上の仲間が12月22日から12月31日の間、上野から移動した計算になる。上野への新たな仲間の流入がなければ 1月 2日の段階では、平均70の数値からこの37名を引いた33名になる筈である。しかし、 1月 2日の人パトでの合計値は99名と、この仮定の数から66名も増えている。とりわけ増加が顕著なのは駅周辺である。12月30日の駅周辺では38名であり、そこから12名の仲間が玉姫に合流しているから人パト終了時点では26名である筈である。だが翌12月31日の段階ではこの仮定の数値より35名増の61名。更に 1月 2日には25名増の86名となっている。60名近い仲間が年末の 3日間たらずの内に上野に流入したと推測出来る。越年期前の駅周辺の平均値が56なのであるから、この60という数は駅周辺の仲間の顔ぶれを一変させたことになるし、実際、仕事バックをもったいつも見なれぬ駅手配飯場層の仲間で地下道が占められるという状況になっていた。

駅周辺の個別的な特徴としては、我々がいつも炊き出しを行っているJRの地下道から、さらに京成や地下鉄の地下道、その他駅周辺へと仲間が分散していることである。京成の地下道などは、追い出しが他の所より厳しいことを「通年層」の仲間は知っているだけにあまり近寄らない場所であるが、越年期には10名程度の仲間がそこにいた。その他広小路口を中心として各所に分散している。

一方公園周辺においては越年前の平均値より12月30日、31日では 4.5名増えているが、この程度の増加は天候や調査の方法により常に現れる数であり、越年期の平均値もそれ以前の平均値と変化はほとんどなく、狩り込みや大田寮行きを考慮しても、数での特徴は特に語られない（上野公園の広さが起因とする出会いの難しさもあり）

年末の 3日の間に60名ちかい仲間が上野に流入したと調査数から仮定したが、この仮定を検証するのが越年明けの調査数である。 1月 9日に行った越年明け初めての上野人パトではどうなっていたのか？当日は昼間雪まじりの雨が降り、いつもより地下道に仲間が集まる条件はあったものの地下道の総数では78名と 1月 3日の比較では＋23も増えおり、越年期間最高記録の 1月 2日の61と比較しても＋17であった。その他駅周辺トータル数で87、公園周辺数は28、合計で 115名という数字が出た。これを年末の移動の仲間の数が比較的数の上で出ておらず、「通年層」がある程度確定できると思われる12月 5日と比較してみよう。12月 5日の合計62という数の仲間が年末大田寮などへ移動をしたとしても 1月 9日時点でまた上野に戻って来ていると仮定すれば、12月 5日と 1月 9日の比較で出た数は、新たに流入してきた仲間の数を表わす筈である。すなわち地下道で＋33、駅周辺トータルで＋35、公園周辺で＋18となり、合計では＋53となる。

ここからもほぼ50〜60の仲間が数的にははじき出される。

大田寮などで年末移動していたこの「通年層」の仲間が越年明けに戻って来たが、しかしながら越年期に新たに流入してきたこの50〜60の駅手配飯場層の仲間は依然停滞したまま多数残っている。それが越年明けの仲間の数を増大させている主要原因だと推測される。

③　越年期上野人パトの全体状況

越年期前の問題意識としては、通年的におこなってきた人パトの継続を軸に、大田寮がどれだけ上野の仲間に知れわたっているか、そしてそこへの移動が上野ではどの規模でおこなわれるかをポイントとしてきき込みを行ない、受付場所の変更や、「足切り」の可能性などの状況を知らせるとともに、玉姫への結集を呼びかけることが上野人パトの課題として浮かんでいた。越年期における上野の仲間の移動状況などは不明であり、その動向把握に主眼をおいていた。

越年最初の28日の人パトにおいては前回人パト時より人数的に減っていた。大田寮の話しもこの間の話しこみなどからかなり広まっており、かつ11名が大田寮へいくために玉姫に合流したこともあり、山谷や浅草同様に減少傾向に推移することが当初は予想された。

一日おき30日の人パトにおいて、大田寮の受け付けも二日目が終わり前回よりも減少する条件が揃っていると思われたが、地下道に仕事バックを枕にしたいつも見なれない仲間が多数いた。話をきいてみるとここ 2.3日の間に、飯場から出され上野に来た仲間がほとんど。これらの仲間は大田寮や山谷のことはあまり知らない。その他地方から仕事を探しにきたいままで工場に勤めていた仲間もいるなど、これまでの地下道の雰囲気とガラリと様相を一変させた。

30日の新宿人パトでの 314という数字もあり、駅でのアオカンの仲間の増大がこの越冬期の特徴として推測され、その層が駅手配飯場層ではないかと予想されるなか、その確認のため31日段階から、駅手配構造の調査ききとりに広域、周辺人パトのポイントを移す。越冬期でなければなかなか集中的に話しこめない駅手配飯場層の仲間との出あいから、現在の不況下のなかで強まっている「飯場支配」というものの実態を明確にし、春にむけたたたかいの切り口の材料を見つけるとともに、駅手配飯場層の仲間との団結の萌芽をつかむことが必要との判断。

31日の人パトからその観点からのききこみを開始、上野では地下道のおよそ 6割が駅手配飯場層であることが判明。28、29日に契約が終わり、飯場から出されたが、ケタオチのデズラでは手元にいくらも残っておらず、アオカン。「駅手配の飯場は正月いられない所が多いネ」「ここ（地下道）は 5千か、 6千円だよ。俺はこんなところから行かないけどね」

なお、この日上野にイラン人が新年の祝いをやるために大勢集まってくるのではないかとの情報があり、京成口のほうも位置づけようとしたが、 8時半で 200人、10時半で20人以下といつもとあまり変わらない。

年があけてから上野は 2日に人パトを取り組んだ。この日99名と越冬期最高の数。飯場から帰ってきた人はいつでも仕事に行ける体制をとっている。「デスラは向井でヌキ 5千円、もっと出すところもある」「京成の方はヌキで 8千円出すところも、西郷さんはヌキ 5千円」などの声が聞けたが、手配師、業者などの話しは聞けない。上野に詳しい仲間の話しでは「手配師から脅かされている。へたなことを言ったら二度と使わないし、タダじゃすまさない」らしい。こんなことも影響しているのか。確かにこれまでの上野人パトでも向井のことは何人かからその一部は聞いていたが、他の業者、手配師の話しなどはあまり聞けておらず、仲間の口は山谷に比べ固いことは事実であった。

しかし、 1月 2日新宿人パトに参加してくれた仲間から上野公園手配の話しがきけた。『上野の公園手配なら、そこに去年の10月くらいまで半年くらいいましたよ。「高橋建設」って所ですよ。建築の土木関連の仕事を主に

やってますね、元請けは清水とか大手ですね。朝霞に200 人規模の大きな飯場がありましてね、ヌキで 9,000円でした。だいたい朝 7時ころ上野の西郷さんのあたりから京成口のあたりで手配してますよ。住吉系ですかねあそこは。結構あちこちからあげてるみたいですよ。ワゴン車26台くらいまわして上野や新宿や池袋なんかからあげてるらしいですね。飯場に入るとタバコと酒をおごってくれるんですよ。正月も飯場はあいてるとかいう話でした。金払いはいいですよ。満期してもそのまま延長できますしね。でも仕事が出来ないとすぐ帰ってくれって言われますがね。とびはたしか12,000円でしたね。上野で高橋以外はたいがい6,000 円くらいですよ。向井は行ったことありませんがね』

この情報をもとに 3日の上野人パトでは地下道での話し込みを重点的に行った。この結果この高橋建設と高木建設という業者を手配している沢田という手配師の存在が明らかになり、この沢田はこの日 7人をあげていったことを確認。その他手配関係のワゴン車が止まっていることも目撃。すでに駅手配は動き始めていることが分かる。高木建設で10日働き 4万 5千円しか残らなかった仲間の話しがきける。

『年末の28日まで「高木建設」で働いていた。29日の朝に上野に戻ってきた。「高木」は京成口の階段の辺りで沢田という手配師があげている。沢田は「高橋建設」も一緒にあげている手配師で、かなりの数を上野からあげているから結構みんな知っているよ。「高木」は千葉の実籾に 100名くらいの飯場があるが、そこは正月はいられず、みな29日に出された。飯場には土佐犬まで飼っていて、部屋は15人の大部屋だった。飯はまあまあだったがとにかくひどい所だ。刑務所なみだね。もぐりの業者らしくＴＥＬ帳にも載っていないよ。どこの組か分らないがヤー公関係だろうね。デズラは 9,000円だが、そこから飯代など 2,000円以上ひかれ、しかも残業しても残業代なんかくれやしない。とくに朝がシンどかった。 4時におきて札をかけなければ仕事にアブレちまうんだ。飯場にはいって 4時だよ。おまけに 4時すぎから車に乗って現場に行くんだ。現場がそんな遠くな訳じゃないのに。現場に着いてから朝飯をくって 8時まで待たされるんだ。元請けは京成建設の建築の現場でとびの手元やコン打ちをやらされたよ』

『沢田は手配する時結構人を見て選んでいるな。体のよわそうな奴は絶対つかわないからな。今日(1/3) も 7人位あげってったらしいよ。沢田の奴は「高橋」と「高木」の飯場に上野から 200人（月？）は入れてるんじゃないか。「高橋」はね、朝霞に２ヶ所飯場があって、他にも成増に１ヶ所と、あとどこかわすれたけどもう一ヶ所に飯場があるんだよね。新宿では東口であげているよ。安藤組の組員もそこに来ているらしいよ。あそこは15日契約でデスラは 7,000円から始まって、更新すると 500円ずつあがって、最高9,000円までだね』その他さまざまな情報が得られる。

駅手配ヤー公飯場での労務支配の実態が仲間の口から次々と語られる。巨大飯場に仲間をスシずめにし、債務奴隷のように低賃金でこきつかい、飯場内アブレをおしつけ精算しても赤字になるよう仕組んで行く。年末このような飯場から放り出されるやすぐさまアオカンに直結せざるを得ない仲間達。越年期に現われ、われわれが接した上野の仲間の現実はまさに資本の日雇労働者の局限的な使い捨ての実態であった。

越年期間中のイラン人との出会いの中で労働相談が 3件あった。その他、日本テレビ「進め電波少年」による外国人労働者、とりわけて上野のイラン人に対する差別排外主義を増長させるものでしかない差別番組に対する抗議として、在ア共など日頃上野人パトをともに担っている団体らによる日本テレビ土屋を呼んでの「話し合い」に人パト班も参加した。「 1万円を貸すから希望者はハガキに書いて応募してくれ」というペルシャ語のビラを撒き、不況下のなか突然の解雇や賃金未払いなどが横行している状況下で経済的に逼迫しているイラン人に対して、金の貸借りという屈辱的なことを高見から行い、かつその様子をテレビカメラで隠し撮りをし笑い者にしようとする悪質な番組を、「在日イラン人と同じ視線の高さに立った交流」などと居直る土屋を糾弾し、ついに「放映中止の方向で考えている」なる回答書を出さざるを得ない所まで追い詰めた。

（文責　Ｋ）

越年期浅草人パト報告

（１）人パトで出会ったアオカンの仲間の数の推移

☆越年期

PM8:30～10:30	12/29	1/1
隅田公園言問橋まで	27	25
東武鉄橋下	3	5
新仲見世通り周辺	4	6
駅地下道	10	23
浅草公会堂	3	4
浅草寺周辺	1	4
駅周辺	21	42
合計	48	67

☆越年期前

11/18 調査人パト PM10:00～

隅田公園	51
駅周辺	44
計	95

11/25 調査人パト 深夜

隅田公園	50弱
新仲見世通り等	70弱
雷門～江戸通り	28弱
計	148弱

☆越年明け

93.1/14人パト 雨 PM8:00～

隅田公園の一部	13
駅地下道	34
新仲見世通り	19
浅草公会堂	1
東武鉄橋下	4
計	71

（参考）

＊92年 2月11日浅草人パト PM 8時半～10時半

隅田公園	10
駅周辺	23
東武地下道	12
計	45

＊92年 8月13日浅草人パト PM 8時半～10時半

隅田公園	9
駅周辺	53
東武地下道	1
計	63

（２）仲間の数の推移から判明したこと

浅草人パトは通年的におこなっていないため、仲間の数の調査数の推移から行う分析は難しい。しかも駅周辺部は時間帯によって仲間の変動がかなりあるため正確な数は未だつかめていないのが実状であろう。

調査人パトでは時間が深まるに従い新仲見世通り等に仲間が集まる傾向が見えるが、隅田公園においてはほぼ50の数は一定している。

駅周辺においては同時間帯で行った11/18 の調査人パト44という数が平均値に当てて良いと思われる。隅田公園では50を平均値としておきたい。

越年期始めの12/29 人パトでは、この平均値が隅田公園、駅周辺部とも綺麗に半減していることが分かる。公園で△23、駅周辺でも△23で計46のマイナスである。

11/18 から12/29 までの間におこった移動の原因と思われる出来事は12/3の狩り込みと、大田寮への受け付けの開始である。だが狩り込みの人数は 8名弱でさほど大きな数ではないことからほぼ大田寮の受け付けが、仲間の半減した要因としてあることが推測される。浅草の仲間は山谷との距離が近いだけあって、就労のみならず、頻繁に行き来を繰り返している。それだけ情報も早くつかめるので29日の初日の大田寮の受け付けには多くの仲間が行っていると思われる。また玉姫越冬への参加ということも考えられるが、実態としては玉姫で飯を食ってから夜はまた浅草に戻る仲間が多いため、玉姫で夜を越す浅草の仲間は、さほど多くはないと推測される。聞込み等の結果も踏まえると、この半減した46名の仲間の大半は大田寮へ行った層であると考えられる。

1月 1日の隅田公園の数25もそのことをある程度現わしている。29日夜の人パト時と数値上ほとんど変化がないことから見ても浅草の仲間の大田寮の受け付けは29日に集中していることが推測される。アブレ地獄の深まりのなか年末収容所へ仲間が多く集り、「足切り」が予想されることを浅草の仲間も一早く察知して受け付け初日に動き始めたのであろう。

ここまでは容易に分析できるが、この 1日の駅周辺の42という前回比での＋21、倍増をどう読むかが鍵となる。

1日は浅草寺の年始参りとの関係で夜遅くまで駅周辺は人混みがあふれ、アオカンするには適さない条件がそろっていた。その関係上新仲見世通りなどにはあまり仲間はいなかったが、その一方地下道には前回比＋12の23名の仲間が集まっていた。地下道の仲間の数の増加がこの越年期浅草での大きな特徴でもある。越年明けの 1月14日の人パトでも雨という条件があったが地下が34と、周辺と比較してもズバ抜けて多くなってきている。

数のみならず、話し込みの内容などを検討すると、上野と同様の現象が浅草でも、少なからず起こっているのではないかと推測づけられる。すなわち年末期に飯場から出された駅手配飯場層の流入である。しかしその数は上野ほど顕著には現われていない。玉姫職安の手帳をもっている層がかなりおり、その就労場所も山谷が大半をしめている浅草の場合、浅草のアオカンの仲間が浅草駅手配に依存する割合いがかなり小さいことからも、そのことは規定されているだろうし、またこの不況下で駅手配に依存する割合いが相対的に増加していても、それらの層は大田寮のことなど知っているだけに、わざわざ人混みの激しい年末の浅草に戻りアオカンするより、大田に行く方を選択するであろう。さもなければ玉姫に来るなり、他の駅に行く方を選ぶと思われる。上野と比較して駅手配の占める割合いが小さいこと、及び、年末年始という浅草の特殊条件が新たに流入してきたこの層を見えにくくしていると思われる。これらの層は、様々な事情で山谷で就労できないもの、駅を転々としながら、まだ山谷にたどりついていないものがその主要な層であると考えられる。 これら浅草に戻って来た駅手配飯場層の数としては12/29 と1/1 の駅周辺の比較値である21がおおよその数を表現しているであろう。これらの仲間がおもに地下で仕事バックをかかえ寝ていることから、地下を比較してみると12/29 と1/1 の比較で13、12/29 と 1/14 の比較で24という数が出てくる。いずれにしても、10～20の小規模であると推測される。

（３）浅草人パト全体の動向

浅草は上野と並んで山谷の周辺部の中では大きな位置をしめている。隅田公園を通じて山谷とは密接につながっており、山谷の労働者のアオカン場所の外郭部として位置しているといってもよいだろう。浅草は大きく分けて隅田公園と駅周辺部に分けられる。隅田公園は山谷と結びつく独特の位置にあり、隅田川を台東区と墨田区をはさんでかなりの広範囲にわたってアオカンの仲間が存在するが、時間を制限された人パトにおいては全てをまわりきることは出来ないため、浅草人パトにおいては台東区側の言問橋までをその範囲としている。隅田公園の仲間はダンボールで囲ったなかに寝とまりしており、雨が降るとブルーシートでそれを覆って、ほぼそこに定着している。ここの仲間は山谷とかなり結びついており、就労場所もほぼ山谷である。手帳保持者が多く、都の仕

事へ行き、その金が生活の糧となっている場合が多い。横のつながりもかなりあり、自分で働いた金で酒や食料を分けあっている。また教会関係の炊き出しもかなり行われている（山友会、マザーテレサ、森本、六本木の教会等）場所でもある。

駅周辺部に関しては、東武の地下道の商店街の前、その他地下通路の階段部分、東武のガード下から江戸通り、新仲見世通り、浅草公会堂、浅草寺周辺などかなりの範囲に散らばっており、その全てを把握している訳ではない。ここにはバタヤの仲間や、「通年層」「現役層」など様々な仲間が雑多に存在している。ここも隅田公園と同様、山谷とはなんらかのつながりをもった仲間が多い。新仲見世通りや公会堂周辺にダンボールで囲って生活している仲間はほぼ「通年層」の部類に入り、寝る時はその場所に定着しており商店主や、ガードマンからある程度「認知」されているが、その他の商店街の軒先においては、店先にロープを張ったり、「ここで寝るな」なる看板があったりと、実際の追い出しなどの話はきけてはいないがかなりシビヤな現実が存在していると思われる。通年層以外の仲間は、地下道で体を休めたり、浅草寺周辺の公園や、六区のあたりを歩きまわったりしながら時間をつぶし、深夜街が静まりかえったあとで寝ぐらを探す。その関係上深夜に人パトを行うと調査数が増えるという結果になっている。100 弱の仲間が駅周辺にいると推測される。

本越年期人パトでの浅草の位置づけは、上野とならんで山谷の周辺部として位置する拠点としてその動向を注目していた。越年前の 2回の調査人パトで夏の数値と比較して 50%～134%も増加していることが判明したこともあり、山谷と密接に結びつく浅草における仲間の動向把握と、出会いを通した団結形成を目指し、当初の計画では越年期 3回の人パトを予定していた。

当初的にたてていたポイントとしては上野と同様、大田寮への入寮状況の把握と、玉姫越年闘争の宣伝、呼びかけである。

29日の人パトでは同時間帯で行った 11/18調査人パトと数値がほぼ半減していることが判明。その要因としては大田寮への入寮がほとんどである。大田寮へいかなかった仲間は「好きじゃない」「ここでも生活出来るから」と大田寮は知っていながら自らの選択で残っている仲間が多い。玉姫越冬に関してはすでに知っている仲間がほとんど。「今日も行ってきたよ」「あそこで飯食わせてもらったよ」「いつまでやってるの？」　大田寮にいかない仲間の越年期の生活パターンの一部として玉姫越冬がすでに定着していることを改めて実感させられる。飯を食うだけという関係性のみに押しとどめている傾向がまだまだ強いが、それでも山谷から来たというだけで、話しはよくしてくれる。隅田公園では我々の人パト時に、マザーテレサ関係の人がパンと、六本木の外人 3名がおにぎりを配っているのと遭遇。共に寝ている仲間の頭にパンやおにぎりを無造作に置いていくというもの。そのため寝ているのを起こされ迷惑がる仲間もいた。駅周辺は時間帯が早すぎたためかあまり仲間の姿が目だたない。特に新仲見世通りにダンボールで囲んで寝ている仲間の姿が調査時より少ない。残った仲間の話しではここの仲間の大半も大田寮へ行ったということであるが、まだ寝場所を確保せずに動きまわっている仲間がかなりいた。

30日の段階で玉姫公園内の仲間から「今日の夜、浅草で狩り込みがあるらしい」との情報があり、急遽PM11:15 ～AM2:10まで浅草の特別監視レポを行ったが結局狩り込みはなかった。

31日に予定していた浅草人パトは浅草寺への初詣での関係で仲間が散ることが多分に予想されたので上野にスライドし、浅草人パトは 1日に行った。

1日の段階では、上野において駅手配飯場層の仲間が流入していることが判明していたため、浅草においても同様の事態が発生しているのかどうかが大きなポイントとなる。浅草寺の初詣でという人パトを行うには不利な条件があったが出来るだけ仲間からの聞き込みを中心に行うことにした。仕事バックをかかえて寝ている仲間が多く、おそらく飯場層がかなりいると思われる地下道における聞き込みが、時間の関係上あまり出来なかったが

それでも各所において年末飯場を閉められ帰ってきた仲間 3名の話が聞ける。葛西組（新聞）に行って来た 2人組と隅田公園の近くであう。20日頃仕事が終わり、それから隅田公園でアオカンをしているという。デズラは 6,000円から諸式を引かれたとのこと。山谷で仕事に行ってたが、仕事がなく、新聞で。その他隅田公園の仲間から浅草手配の業者のことが聞けた。「浅草手配の相場は5.6 千円で、ほとんど人夫出し業者だよ。最近は手配師もあまり来ないけどね」「西山建設という義人党系の業者が夏頃20人位隅田公園かちあげて行ったよ」「観音様の方の手配では4.000 円の所もある」「飯場に行く前に酒を振舞ってだまして連れてかれ精算日に一日3.000 円といわれた奴もいた」「近頃は出来る奴には1.000 円くらい色をつけてるみたいだね」。その他吉原組、宇田川商事などの情報が入る。今は山谷で仕事に行っている仲間も一回はそのような浅草手配に引っかかったことがあるので、そんな話は上野より比較的よく聞けた。

1日以降の周辺人パトは上野に軸を移したため、浅草人パトはこの 2回で終わった。正月期に浅草人パトを行う条件の悪さと、時間帯の問題（隅田公園は遅いと皆寝てしまい話し込みが出来ず、一方駅周辺は10時以降でないと態勢をとらないためまだ仲間が分散している）から今だ全容はつかめていないが、ひとつの足がかりはつかめたのではないかと思われる。

（４）越年後の浅草について若干

越年後の浅草は 1月14日に 1回人パトを組んだだけで、その後の状況は日常的には把握していない。それでも山谷と密接な関係にある浅草の仲間の動向は、山谷での労働相談やセンターの監視活動などでもちらほらと仲間の口から聞ける。また上野人パトでの炊き出しにも浅草の仲間が集まって来ているので、そこの場でも浅草の話になることも多い。アブレ地獄の中、仲間の分散化が強まっている中、周辺部分への取り組みをせねばならない状況化にありながら体制的な問題でそれが当面は望めないのであるからして、山谷の周辺部、とりわけ浅草、隅田公園の仲間の動向には常に注視していく必要があるだろう。

1月14日の浅草人パトにおいては、金町一家の人パト隊への襲撃などがあり、充分なものとはならなかったが、それでも越年期以降、越年期に大田寮などに入っていた仲間が戻り、おおよそ 100～150 の仲間が浅草周辺にアオカンしている状況が確認出来た。ここもとりわけ駅地下道の仲間の増加がその特徴と言える。隅田公園や新仲見世通りなどはほぼ決まったメンバーで占められているようだが、駅地下道には飯場層などの比較的新しくアオカンをせざるを得なくなった仲間が集まる傾向としてあるように見うけられる。 2月20日の調査で、地下道は33、新仲見世通り45という数字があがっている。地下道での仲間は人の入れ変わりはあろうが依然かなりの多さである。

駅手配も浅草手配の「長岡土木」（デズラ7,500 △1,500)で働いていたが、休みが多くて結局赤字になりトンコしてきたという仲間などの話も聞けている。

また仲間の情報で、狩り込みが 3月10日行われ、10名くらいの仲間が連れていかれたらしい。福祉や警官など15名くらいで実施したようだが、『一人一人、寝ているところをポリが毛布ひっぱがして「明日の朝出ていけ」って言うよ。何も取られないけどね』と、上野と同じく警察主導の狩り込みの実態が推測される。

まだまだ全体像を分析するだけの資料とはなっていないが、これらの動向などを山谷や上野で出会う浅草の仲間から聞き込み、こちらから出向いていけない運動の側の弱さを補わねばならないだろう。近い将来、是非とも体制を強化し浅草への取り組みを開始していきたいと思う。

（文責　K）

越年期池袋人パト報告

（１）人パトで出会ったアオカンの仲間の数の推移

☆越年期

12/28　時間PM11:50 ～AM2:00

地下道	18
東武プラザ	5
西口公園	2
その他	
地下道入口	4
計	29

☆越年期前

11/25 調査人パト

PM10:00 ～11:00
　地下道　約15
深夜
　地下道出口　約50

（２）仲間の数の推移から判明したこと

すでに調査人パトで、2/25時点（92年）から比較して、地下道の仲間の数が大幅に減っていることが判明していた。上野や新宿など駅でのアオカンの仲間の数がこの一年間、不況の進行とともに仲間の分散化傾向とともに増えつづけている傾向にあるなか池袋の仲間だけ減少傾向として推移していることになる。前回の越年期とその前後の池袋人パトでは広い駅地下道であちこちに仲間の姿が見うけられたが、今回の人パトにおいては逆に仲間の姿を見つけるため歩き回らなければならないという状況の変化であった。

越年期にはかなり遅い時間帯で人パトを設定したが、それでも計29と深夜の調査人パト時に比較しても約20程更に減っている。地下の出口が何ヶ所もあり、地下が閉められてからの仲間の動向がはっきりつかめてないので、その追跡が難しいこともあり調査箇所においての数のバラツキはあると思われるが、昨年の越冬期と比較しても仲間の数がこの一年間でかなり減っていることは明らかである。どの程度の減少かは調査不足のために不明である。

（３）池袋人パト全体の動向

今越冬期の池袋人パトは広域の枠の一つとして設定した。越年期間中 1回のみの人パトであったが、問題意識としては昨年よりの仲間の減少傾向をどう見るのか、その要因を探ることにあった。考え得ることとしては、駅からの追い出し、及び駅手配の減少ということが考えられた。

池袋の地下道はＪＲ、東武、地下鉄、西武にまたがりかなり広い範囲で存在している。地下道は12:40 位に閉まるが、それまでは出入り口の下の小さな空間や、コインロッカーの前、自動販売機の横など人目につかない場所などで仲間が点々と体を横たえている。地下道が閉まる前になると仲間はそれぞれの場所に移動するために、荷物をもって動き始め、始発電車が動き始める時間まで駅の周辺を歩きまわったり、風あたりのない場所で体を

休めたりしながら、再び地下道のシャッターが開くのを待っている。

池袋は馬場から 2つ目の駅ということもあり、池袋の仲間は馬場手配に依存している者が多いが、池袋の駅手配から仕事にいっている層も若干存在する。その他「通年層」の仲間から構成されでいる。

28日の人パトにおいては人パト隊が到着する頃には地下道の仲間はほとんど外に出る準備をしており、人数の把握はほとんど出来なかった。定点を定め荷物をもって歩いている仲間に声をかけ炊き出しを配るが食数はあまり出ず。池袋にいついて10年になるという仲間とそこで話が出来る。業者名は教えてくれなかったが「ボチボチ仕事は行っているよ」「ここも手配師は少なくなったけど朝の人夫出しはまだそれなりにあるさ」「不況のせいかな、賃金を払わない業者が多くなったって話だけどね。俺の知ってる仲間も被害にあっている」「池袋は住みやすいよ。ここは追い出しはキツクないしね」

シャッターが閉まってから仲間の情報で東武プラザの方へ行く。東武プラザの地下口は丁度風あたりもなく、人目にもつきにくい所で絶好の場所。いつも10人程度の仲間が集まっているということ。我々がついた時にも 5人の仲間がダンボールの上に毛布で身を包み、眠る態勢に入っていた。仕事は馬場から行っているという仲間は「ここが池袋一の暖かさの場所さ」と笑う。「東武の警備員が回ってくるけど、人数を数えるだけでなに一つうるさいことは言わないさ」

このあと、夏場には多くの仲間がいるという西口公園の方へ行く。東武プラザで寝るという仲間とここでであう。オルガン弾きをやっていたがアパート代が払えず 2ヶ月前からアオカンしているという。「仕事はしてないよ、親切な人から食い物はもらえるしね」。この仲間から地下道での追い出しの話をきく。「今日の夕方中央通路で休んでる時、ＪＲの職員からここにおったらあかんと注意されたから、警備員は何も注意せんと反論したところ、 2-3分後助役クラスの駅員が 5人くらい集まってきて、肩を殴られて地下道から引張りだされた」。豊島区の「合同パトロール」の話もこの仲間から聞く。「ひと月まえかな。ポリが 1人と役人 2人、駅員 2人の 5人くらいで夜の11時頃、横になってる人全員に声をかけてまわっていた。体の悪い人には福祉へ行けというだけで何もしてくれなかったという話だよ」

同じ西口公園で29才の若い仲間と会った。芸術劇場の所でいつもアオカンしているという。仕事は新聞で飯場から飯場へ渡っているという。若葉建設という新聞手配の業者の話を聞く。「ここは経営不振の業者で金払いが悪い。おまけに10日契約でいっても 5日くらいしか働けなかった。 5〜6 人の飯場で、仕事があまりないんだ」「新聞は当り外れがあるね」

その後、西口周辺の地下道の入り口を見て回った。階段の下、シャッターの前あたりにダンボールを敷いてその上に眠っている仲間の姿が数名確認出来た。

1回だけの人パトだけではおおよその傾向性しかつかめず、調査不足の感が強いが、把握出来たこととしては、5年10年と池袋で寝泊りしている仲間は、離れることもなく「しぶとく」ここで生き抜いているようである。大田寮や山谷の話をしても、知ってはいるが、率先して行こうとはせず独自の方針で越年を考えているようだ。また駅手配は減ってはいるがまだそれに依存している層はそれ相応にあり、一方そこからはじけた部分も馬場や新聞などでの就労で、かろうじて生活をしているようである。ＪＲ職員による暴力的な追い出しや「合同パトロール」に見られるように地下道の状況が昨年より厳しくなったことが予想され、それが人数を減らしている要因の一つではないかとも考えられる。一つの推論であるが、それらを起因として、馬場の現金層の部分は新宿あたりに移動したとも考えられる。

（文責　Ｋ）

越年期高田馬場人パト報告

1. 人パトで出会ったアオカンの労働者の人数の推移

	日付	天候	時間帯	範囲・人数
越年期	12.29	晴れ	9:00p.m. ～ 10:50p.m.	戸山公園　42人 西戸山公園　8人 ／計 50人
越年前	12.2	晴れ	8:30p.m. ～ 10:00p.m.	戸山公園　31人 「三翔ビル」 とその周辺　4人 西戸山公園　0人 ／計 35人

※戸山公園の労働者の多くは「スポーツセンター」のまわりにフトンをしいてアオカンといった状態。ここなら雨もしのげる。

2. 方針について

越年前の12.2調査人パトで、馬場の労働者を対象とする原町福祉と「その他一般」が対象の馬場福祉とを統廃合し、新宿・歌舞伎町に新たに福祉事務所を設けるという計画が新宿区によりすでに実行に移されていることがわかった（今年4月より業務開始）。またこの日、戸山公園の労働者から「10、11月とここでアオカンしていた労働者がたて続けに4人亡くなった」という話もきいた。

福祉事務所の統廃合とこの「4人の死」とはどんな関連があるのか？越年期の広域・馬場人パトでは、以上の2点に労働者との<話し込み>のなかでできる限り迫ることを方針としてたてた。

3. 概況と分析

1) 原町福祉と馬場福祉の統廃合の問題についてはいっさいきけず。というより、多くの労働者は「福祉にかかったことはなく、よくわからない」といったこたえ。

2) 「4人の死」にかんしてもほとんどきけず。が「うち2人は酒を飲み酔っぱってそのまま寝てしまい…凍死」という話をきく。

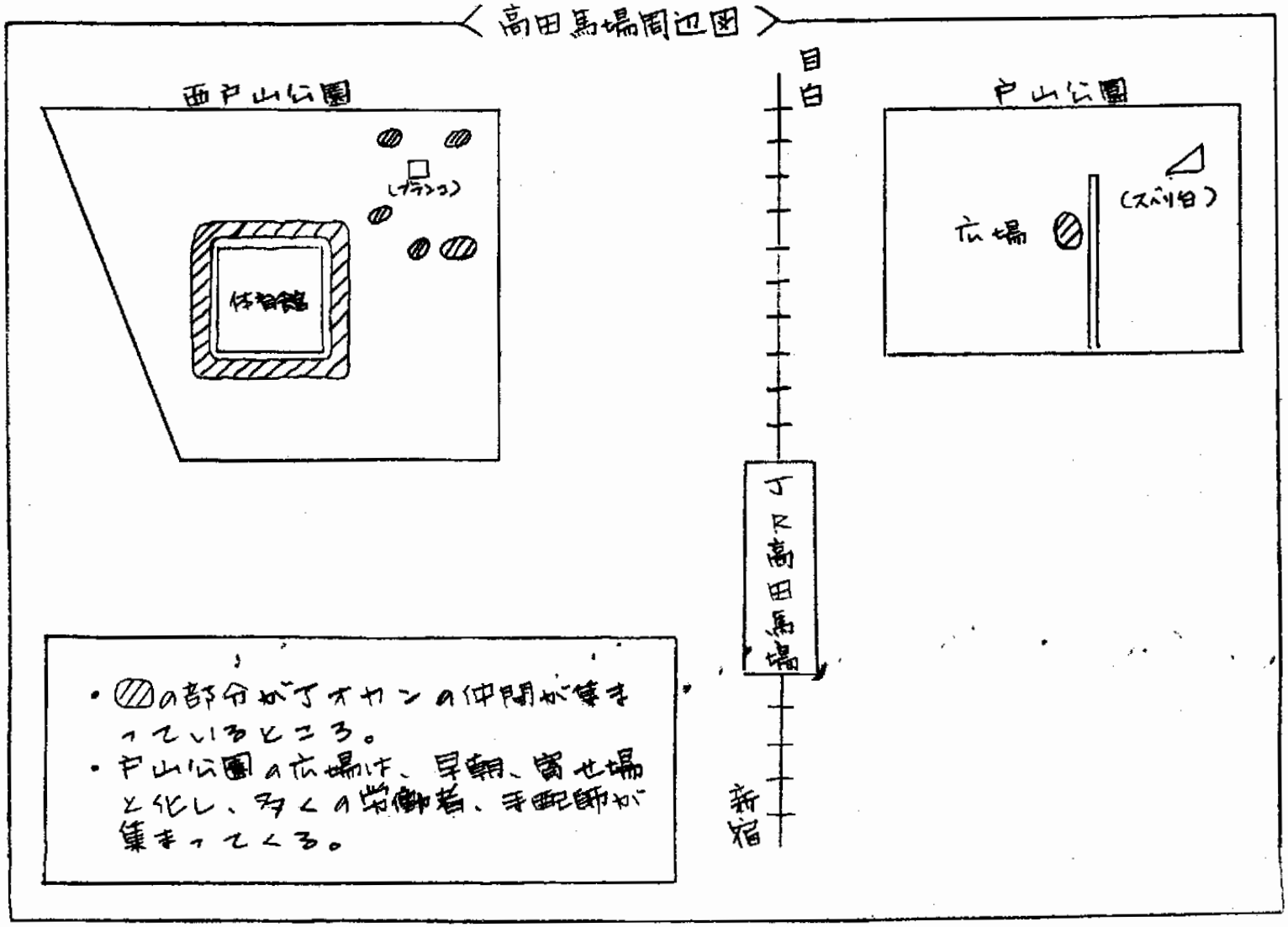
3) 一方、アオカンの労働者の人数が増えていた！「このあたりの仲間もけっこう大井へいった。28日から泊りがけで」（戸山公園の労働者）にもかかわらずだ。これは各地域と同様、年末、飯場を閉め出された労働者が「地元」に戻ってきたため？

4) その他。

(1) 戸山公園の労働者が人パトを手伝ってくれた。いっしょに人パトをまわってくれたり、「炊き出しがあるから」と遠くの労働者を呼んできてくれたりetc.。また西戸山公園の労働者も「あっちにもみんなアオカンしているんだ」と労働者のたまり場をおしえてくれた。それは公園で名称はやはり「西戸山公園」（―確かにこう書いてあった！）。がこの日は、この公園の労働者とはであえず。戸山公園にせよ西戸山公園にせよ、仲間うちのあいだがらがもうハッキリできている！

(2) 戸山公園で、まだ若く33歳の労働者とであう。「ギャンブルですり、家賃が払えなくなってアパートから追い出され、この2～3年、ずっと『宿なし』」「だから友人の家にころがりこんだり、馬場から飯場にこもったり、アオカンしたりしている。」「が来年早々から仕事は確保している。スポーツ紙の求人でみつけた『日通』の配送の仕事」「いまは仲間とふたりでアオカン」大井のことを伝えると「ぜひいきたい」ということで玉姫までできてもらう（ツレの労働者は「ここでがんばる」とのこと）。

（文責・N）


高田馬場周辺図
西戸山公園
(プランコ)
体育館
目白
JR高田馬場
新宿
戸山公園
広場
(スベリ台)
・▨の部分がテオヤンの仲間が集まっているところ。
・戸山公園の広場は、早朝、寄せ場と化し、多くの労働者、手配師が集まってくる。

越年期新宿人パト報告

1. 人パトでであった労働者の人数の推移

日付	越年期		
	12.30	1.2	1.3
天候	晴れ	晴れ	晴れ
時間帯	11:55p.m. ～ 1:40a.m.	9:40p.m. ～ 11:30p.m.	9:50p.m. ～ 1:00a.m.
範囲	西口地下一帯	西口地下の一部 (地下道・都庁側 公衆電話センターを除く)	西口地下一帯 南口 中央公園
人数	276人	171人	264人

越年前	越年後
12.2	1.15
晴れ	雨
10:30p.m. ～ 11:30p.m.	11:30p.m. ～ 0:20a.m.
西口地下の一部 (公衆電話センターを除く)	西口地下一帯 南口
193人	257人

※1 新宿の仲間のほとんどはダンボールを囲ってアオカン。とくに西口地下の労働者がそうで、何十本とある柱の下にダンボールが延々続くといった状態。

※2 12.30、この日人パトに参加したある労働者によると、午前0時半ごろ、中央公園で、計37～38人の仲間がいくつものグループにわかれ「大宴会」をしていたという。この人数をふくめれば、12.30の労働者の人数は300人をこえることになる。

2. 方針について

越年突入までに、新宿に対しとくにこれといった方針を設定することはできなかった。が突入後、12.30人パトの結果、労働者の人数が越年前の12.2調査人パトの際より100人前後も増えていたため、以降、この人数増加の根拠に迫ることを方針としてたて、急ぎょ1.2～1.3と連続で広域・新宿人パトを取り組むことにした。

3. 概況と分析

1) 越年期、新宿でアオカンの労働者の人数が急増したのは以下の根拠によるのではないか。

(1) バブル崩壊のあおりをうけ、年末、飯場から締め出された労働者が多数でたこと（12.30、中央公園で大宴会をしていたのはおそらくそんな労働者だったのだろう。ほとんどの業者が28、29、はやいところで25、26に飯場を閉めたようだ）。それも、ふだん新宿から仕事にいっている労働者だけでなく、川崎、あるいは山谷などから仕事についている労働者が新宿まで流れてきていたこと。

(2) 東北地方から出稼ぎにきていた労働者が多かったこと。上野ならともかく、新宿まできていたとは...。これは今越年、特有の現象か？（がほかの労働者の反応はつめたく、1.3、西口地下でであったある労働者は「いちどに20人近くもきやがって。俺たちの仕事がよけい減るじゃないか！」と怒っていたという）。

(3) 馬場の現金層の労働者が年末仕事にアブレ、越年のためのドヤ銭、サウナ代などを確保できず、ほかの場所に比して相対的に暖かい新宿・西口地下に集中していたこと。

(4) その他、山谷の「通年アオカン層」がやはり、暖かく寝られる場所をさがして、あるいは歌舞伎町あたりででる「残飯」を目当てに、一定数、西口地下に集まってきていたこと、また不況のもと、事業が倒産し、新たに新宿の寄せ場に流れついた仲間がいたことなども人数の増加の根拠にあげられるかもしれない。

2) 新宿の飯場層の労働者が、年末飯場を閉め出されたのちも新宿に戻ってきたその根拠には、単に新宿が「地元」であるということ以外に何かあったのではないか。また山谷・川崎などほかの寄せ場の仲間がこの越年期、新宿に流れてきた根拠にも、新宿には比較的暖かくアオカンしやすい場所が多いということ以外に何かあった気がするのだ。寄せ場から寄せ場への労働者の移動を大きく規定するもののひとつは「その寄せ場に仕事があるか否か」である。

では新宿はどうだったのか？

3) 複数の労働者からこんな話をきくことができた。「おれは正月4日から仕事だ」「手配師は3日の夜あげにくるといっていた」また12.31渋谷人パトで、いつも西口地下でアオカンしているがこの日はたまたま渋谷にきたという労働者とであったのだが、この労働者も「4日から仕事だ」と余裕の笑み（？）すらうかべていた。そして「実はこの前も新宿から仕事にいき、途中で清算してきたばかりなのだが『それでもかまわないからやってくれ』と手配師からいわれている」「現場は都庁のすぐ近く、52階建てのビルの工事。常時人夫1500人は必要な大きな工事だ」とも話してくれた。ちなみにその後の調査で、このビルの名称は『新宿パークタワービル』、元請は大成、鹿島、清水の3社、下請も約30社入っており、そのうちのひとつにはよく西口地下で労働者を手配している安藤組系の業者「(有)こぶし建設」があることがわかっている。さらにこのこぶし建設は調布・仙川に70～80人規模の飯場をもっているのだが、12.29、いったん飯場を閉めたうえで、元旦の朝から西口へ手配師を2人送り込み、前にも手配したことのある労働者のなかから「見込みのあるヤツ」だけもういちど5人上げて飯場に囲い込んだという（このやりかたはいままでにもあったのか？）。

4) つまり、である。新宿には正月早々から仕事があることがわかっていたからこそ、年末、飯場層の仲間は新宿に戻ってきた、また新宿なら仕事にありつけるなどの情報が仲間うちでひろまった結果、山谷、川崎などほかの寄せ場の労働者が流れてきたともいえるのではないかということだ（調査不足のためあくまで推測でしかないのだが）。とすれば、これも越年期、新宿でアオカンの労働者の人数を増加させたひとつの根拠だった？

5) 越年後、労働者の人数は減少傾向にあると思われる（1・表参照）。年明け、実際入飯できた労働者が若干いたためか？

6) 新宿・駅手配の実態、それはもうひどいものである。相場でヌキ5000～6000円というが、もっと安い業者もあるのではないか。1.3新宿人パトでは、午後11時半すぎ、西口地下でいかにもヤクザ風の手配師が、もうまっくろ、荷物も紙袋ひとつきりという労働者をあげていくのを見た。いったいデズラはいくらだったのか？

7) その他。越年前の12.2調査人パトで、複数の労働者から「11月、新宿でも街頭相談があった」という話をきいた。「西口地下・住友銀行のあたりにテントをはり、カップヌードルでおれたちをおびき寄せた」「原町、馬場、新宿の福祉事務所の3者共催だった」が越年期、これ以上の情報はえられず。

（文責・N）

越年期渋谷人パト報告

1. 人パトでであったアオカンの労働者の人数の推移
   1) 日付 ―――――― 12.31
   2) 天候 ―――――― 晴れ
   3) 時間帯 ――――― 9:20p.m.～10:50p.m.
   4) 範囲・人数 ―― 駅地下道で計13人

2. 集約
   1) この日は「原宿・渋谷越実」の渋谷人パトに合流した。
   2) 労働者との話し込みから。
      (1) むかし馬場から仕事にいっていたが、今は体がきかなくなってアオカンという労働者が2人いた。 うち1人はもう70歳の労働者で、この5年間ずっと渋谷でアオカンだという。いつも第一勧銀の下でダンボールをしいて寝ている。「子供（いわゆる『チーマー』？）がゴミを投げてきたりでなかなか大変だ」もう一人は60歳前後（？）の労働者で「昭和58年ごろ、馬場から静岡に出張にいって労災にあい、右足を骨折した。その後遺症でいまはつえをついて歩いているんだ」という。メシはどうしてるの？ときくと「仲間がよく弁当をもってきてくれる。残飯だよ。でももらいものはあまり食わない。おれだって仕事してる。そのへんに捨ててある雑誌を拾って売ってるんだ。だからおれはその金でメシを食ってる」。

      (2) 「よく新宿の西口から仕事（出張）にいく」という労働者ともであう。「いま都庁のとなりに52階建ての『東京ガス』（正確には『新宿パークタワービル』）をつくってるだろ、あれだよ。いま32階までできてるんだ。だから来年は4日から仕事だ」「 実はこのまえも途中で清算してきたばかりなんだけどきのう30日、新宿で（この労働者はいつも新宿・西口地下でアオカンしているそうだ）同じ手配師に声をかけられたんだ。『それでもかまわない、とにかく常時人夫1500人は必要なんだからやってくれ』って。条件？ヌキ5000～6000円だろ。業者名？下請だけで30社ぐらい入ってるからわかんないよ」一定の余裕を感じる。そばにいたツレの労働者も、やはり4日から同じ業者で働くという 。

      (3) 山谷の労働者にも2人であった。 この3日間、ずっと2人で行動しているという。おととしは玉姫で越年に合流し、きのうは寿でアオカンし、きょうは渋谷の駅地下で寝るという。「寿の公園で寝ていたら、ガキ7～8人に『こんなところで寝ていたらいけません』といわれ、追い出されちゃったよ」大井へはいかないの？ときくと、1人は 「きのう受付までいったんだけど『所持金は17000円あります』と正直にこたえたらきられちゃった」というこたえ。もう1人は「おれはアオカンでいいんだ」。

（文責・N）

山谷内人パトの報告

越冬後段（越年明け～３月末まで）

ここに一つの報告がある。越年明けの山谷人パトを振り返るときに、避けては　通れない重大な報告である。（２／28［山谷から］より）

――２月３日付けの『毎日デイリーニュース紙』によれば、山谷の路上（含む・ドヤ）で発見された「死者」（浅草署管内の山谷内と周辺・台東区での死亡者）は、今年１月１日以降だけで26人を数えている。昨年は一年間で89人、一昨年は63人であるから、今年のペースは異常である。（正常なペースなどあるはずもないのだが）さらに山谷周辺の他署の管轄地域も含めると、想像を絶する数がはじき出されてくることは確実である。

私たちは、越年後の越冬後段の人パトを、山対室の越冬対策を見据えながら、①潮見寮から叩き出される仲間の実態をとらえ、フォローしていくこと、②２月15日まで開設した大田第一寮への宿泊からアブレた仲間の動向に注目していくこと、を主眼にすえて取り組んできた。しかし、日常的にも「あの公園で労働者が死んだらしい」という声をいつもより多く聞くことはあった。それにしても、26人という数字は、大きなショックである。

私たちが実感しているよりも、遥かに凄まじい野垂れ死攻撃がかけられていることに直面せざるを得ない。

以下は、そうした状況下での報告である。

・越年明けの仕事の出具合

越年明けは仕事が出るまで幾分か時間がかかるものであるが、今年の場合は特に厳しい現実を示している。アオカンを強いられている現役の労働者が現金仕事につける機会はほとんど奪われており、出張仕事にまで顔づけが浸透している状態である。

求人数は昨年来の横バイ状態であり、増える見通しは全くたっていない。

労働センターの広報によれば「例年３月は求人数が多いのですが、今年の場合はそういう傾向が見られません。来年度の仕事の追い込みによる求人の増加は、まだ現れていません」「今後について雇用主（事業所）に聞いても厳しく、見通しは良くありません。求人の水準はまだ横バイ状況が続きそうです」「紹介数全体のうち55歳以上は14％あります。景気の良い時と違って、事業所の雇用基準が厳しくなって、思うように求人開拓が進みません。」

一見して、厳しい状態が続き、高齢者を直撃していることが明らかである。

「仕事があれば」という声にも応えられない現状に加え、「片付けなどの簡単な仕事なら出来る」という声にも全く応えられない。当然にアオカン者数の増加に直結していく。

次ページの一覧表が、年明け後のアオカン者の数である。

越冬前段と比較して、玉姫公園での炊き出し数が、飛躍的に増えていることがわかる。　毎週金曜日に争議団が行っているセンター前での炊き出しは、毎回二百食を越え、三百に近い数にまで上るが、玉姫公園での食数も、常に百食前後として定着しつつある。

ほぼ毎日どこかで行われている炊き出しの一つとして、人パトの炊き出しがアオカンの仲間の間で普遍化してきていると言えよう。

浅草や隅田公園などの周辺部分からも大勢が、この炊き出しのためだけに集まってくる。　昨年前半期は「人パトの炊き出しはまずい」という声をよく耳にし、その後、味の改善に向けて努力してきたことも、玉

	1／9	1／16	1／23	1／30	2／6	2／13	2／20	2／27	3／6	3／13	3／20	3／27
玉姫公園	38	41	43	50	67	74	83	126	90	68	85	166
神社	0	0	1	12	9	12	3	8	7	4	10	14
清川小公園	5	5	7	11	9	7	5	9	6	6	4	8
職安	23	22	23	24	12	17	20	25	18	21	28	16
石浜公園	0	1	0	2	3	3	2	6	6	5	7	2
あさひ通り	30	21	27	24	21	30	31	32	42	42	34	34
日本堤公園	1	3	6	7	9	8	7	8	7	3	7	9
吉原公園	6	3	6	9	9	8	6	11	11	6	8	11
いろは通り	35	34	15	27	11	6	13	30	21	11	14	17
センター前	2	3	1	1	3	4	5	6	6	2	5	3
橋	0	1	0	0	0	0	0	4	0	0	0	1
				太陽荘			山谷堀	太陽荘			山形屋	
				4			1	6			前 9	
計	146	134	129	172	153	169	176	271	214	174	211	281

姫炊き出し数の増加の一因として見ることもできるだろう。

◎毎週金曜日の争議団炊き出し食数

1/8	1/14	1/22	2/5	2/12	2/19	2/26	3/5	3/12	3/19	3/26
260	101	238	220	272	250	299	233	199	321	299

・越年後の都の越冬対策

前述したように、潮見寮と２月15日までの大田第一寮の臨泊施設としての開設の二本立てとなった。（センターからの宿泊援護の実態については別項を参照）

山対室は、大田第一寮のうち２００名枠を、本来ならば潮見寮に入るべき労働者の施設としてあてがい、医療施設もない大田寮に病人を収容するという事態を生み出した。

これは法内援護（生活保護）としてある潮見寮への入所と、法外援護（宿泊援護や給食援護）としてある大田寮への入所をゴッチャにして、混乱した結果を生みだしたものだ。　当然、通院が必要な仲間でも、大田寮に入れられた場合に２月15日をもって叩き出される結果を生み出した。それだけではない。潮見寮に入っていた仲間も、休の回復具合に関係なく、２月15日をもって叩き出された仲間が出てきたのだ。（３月26日争議団のセンター前炊き出しに集まった仲間のうち、潮見寮に入っていた９人のうち、４人が２月15日に出されたことが分る）通院の必要な労働者の収容枠を３７６人から一気に１７６人にした結果が、こうして矛盾をしわよせさせることになった。

・越冬後段人パトの評価（気づいた点を上げていくと…）

・アオカン者の数は、表を見ても明らかなように、日を追うに従って、増加の一途をたどっている。その中でも、数の推移を注意深くみていくと

①都の越冬対策である、大田第一寮の開設時期（越年明けからえ２月15日まで）は、宿泊の収容枠が相対的に広いこともあり、数も１７０人までに収まっているが、この時期を過ぎると、２００人を越える状態が続くことが分る。

その反面、１月16日の人パト時には、前日から２９５人の仲間が宿泊に行っていたにもかかわらず、前の週から比べて12人しか数は減少していない。（前の週の宿泊者数は240 人）いったい２９５人の宿泊者は、どこから来た部分なのだろうか。

山谷内の青カン者の数が、センターの宿泊者数と密接に関わることをしめしながら、300 人余りの宿泊者を生みだしても、数が減らないという側面をどう見ていくのか。なかなか分析しきれていない現状だ。

②月ごとによく見ると、月の始めはアオカン者数が若干減り、月の終わりに向かって少しづつ数が増えていくことが分る。

これは、センターからの宿泊が、「３連泊（金土日）は月に一度だけ」という体制をとっているために、月の始めは誰もが宿泊に行けるが、後半になるに従って連泊に行ける仲間が少なくなることによると考えられる。

・玉姫公園の炊き出し数が、大きな伸びを示している。定着化という側面と、炊き出しに頼らねば食っていけない仲間が増えている側面がある。ほとんど毎日どこかで炊き出しがあるとはいっても、せいぜい一食がいいところで、ほとんど飯にありつけない状態の中、一食の炊き出しが命を防衛していく非常に重要な位置をもっていると考えられる。

・人パトで回ると、「今日は70歳以上の高齢者が多かった」「今回は若い人が多かった」と、週によって感触が違う。定着化が少ないとは言え、かなりの流動化が起こっている。

・一年以上人パトを続けてくると、たいていのアオカン者は「見憶えのある顔」となってくるが、今年に入って「この人とは始めて会ったんじゃないかな」という仲間とよく出会うようになった。話しを聞いてみると、「最近山谷に来た」「いろんな場所（どこかはなかなか話してくれない）でアオカンしていたが、たまたま山谷に寄ってみた」「長いこと病院に入っていたが、退院して以後アオカンしている」一格好も、大きなカバンをもっているが、毛布や段ボールは無い、翌日になればまた他の場所に移りそうな感じ。

寄せ場を中継点にして、流動する姿がますます浮きぼりになっている。

この、新たに寄せ場に流入してくる仲間（そのまま山谷に定着するか、また移動していくかの違いはあるが）私たちはこうした仲間の実態について、もっと深くつかみとっていく必要があると思う。

２月20日、山谷・職安前で出会った77歳の労働者は語った。

「おととしまでは、現金でも出張でも、なんとか仕事はできてきた。いまでも現場まで行ってしまえば、働いて帰ってくることはできるが、とにかく仕事が無い」

「自分は背が低くて、戦争は前線には行かなかったが、徴用で南方の軍事倉庫で働かされていた」「戦後、北海道の炭鉱夫の募集があり、夕張炭鉱で働いていた」「戦後の夕張炭鉱での朝鮮人の決起に直面、自分もずいぶん痛めつけられたものだ。今から思えば、彼等が起ち上がったのは、当然のことだったと思う、とにかく人間扱いしていないんだから」 ――この仲間とは、しばらく立ち話をして別れたが、ぜひともじっくりと話しを聞かせてもらいたいと実感している。少なくとも、今や文献の中でしか知ることができないと思っていた「夕張炭鉱での朝鮮人の決起」の、生き証人と出会えたのだ。山谷でアオカンを強いられている仲間の中から。「黙って野垂れ死ぬな」の実践は、こうした仲間の声をくみあげ、言葉として残していくこと、人パトはその実践活動の最先端で仲間と出合う機会を持っているといえる。さらに多くの仲間との出会いをつくっていこう！

山谷人パト報告・文責H

センターの宿泊援護とアオカンの仲間

―センター交渉と監視活動から

（１）山谷争議団と越冬実は越冬後段のたたかいを、都山対室の「越冬・応急援護」である宿泊援護を一つの焦点として城北福祉センターに対する取り組みを行ってきた。アオカンの仲間へ、医療、福祉対応、炊き出しの側面から人パトを行って来た我々人パト班も、新たな領域としてセンターの宿泊への取り組みを共にたたかっている。

アオカンを余儀なくされた仲間にとって、この仕事もまったくなく、かつ厳しい寒さの冬の間をいかにしのいでいくのかは生死のかかった大きな問題である。今越年期の大田寮への収容者数が過去最高の1960名に達したように、行政の越年・越冬対策に対するアオカンの仲間の利用頻度がアブレ地獄のなかますます増えて来ている。山谷から遠隔地での収容政策のもと、手続きがやっかいで根堀り葉堀り職員から聞かれ嫌な思いをし、なんら「福祉」の体をなさない対策であったとしても、これまで行政と身近でなかった仲間も含め、多くの仲間が自らの置かれた現実の厳しさのなか体を休ませる宿をもとめてセンターに殺到して来る。

そもそも都山対室の行っている越年・越冬対策事業とは越年期間の収容所「大田寮」の開設、12月 1日から 3月31日までの準更生施設「潮見寮」の開設、および 2月中旬まで「大田第一寮」を、通常のセンターが行っている応急援護の宿泊施設に加えること、この 3つの事業だけである。これだけのことを毎年一定数だけ機械的に行なって事足りんとするのが山谷対策の実態である。市民社会から隔離、収容し、建設独占資本の日雇労働者の使い捨てからくるアオカンという目に見える雇用責任、及びそれを放置し、野たれ死にを強制する行政の行政責任を隠蔽し、かつこのことに対する仲間の怒りの決起を未然に鎮圧する。これが越年・越冬対策の主眼である。このアブレ地獄と「冬将軍」のなか日々の生活を必死に生き抜いているアオカンの仲間の現実、実態を理解し、なんらかの対策を練るという建前の姿勢すら皆無なのである。

山谷争議団と越冬実は 1月 4日、 7日、14日、 2月12日、15日と連続して、とりわけ、大田寮に焦点をあてて団体交渉、申入れ行動を連続的に行ない、また毎週金曜日の監視活動と炊き出しを続けている。

当初、センターは大田寮の応急宿泊援護に関して、 1月 8日から17日までは100 名枠、 2月14日までは50人枠という、一方的な枠を仲間に押しつけようとしてきた。大田寮と既存の宿泊施設（民間の契約施設）を利用して、その枠を越えたものは宿泊させず、この寒空のなかパンだけを与え放り出す方針であった。これに対し、仲間の怒りの声をバックに「大田寮には600 人泊まれるじゃないか。希望者全員止まらせろ」の要求を幾度となく叩きつけ、結果的には宿泊の枠をとっぱらわせ、 1月14日には295 もの仲間の宿泊をかちとり、毎週の連泊は駄目というセンターの「基準」も一月期はなし崩し的にとりはらった。 センター宿泊をめぐるたたかいは今回が初めてだけあって、行政の後手に常にまわってしまった観があり、結果的には大田寮も予定通り閉鎖され、現在通常の体制を強いられているが、それでもセンターは大田寮が閉められた後の 2月26日と 3月 5日には共に129 名の宿泊と、通常の契約宿泊施設を最大限利用し、更に雪の降った 3月12日には潮見寮や山谷内のサンライトホテルまでをも動員して161 名の仲間を宿泊させるなど、アブレ地獄の現状と、運動の側を見すえつつ、なんとか問題にならないような政策を行なわざるを得なくなって来ている。市更相から火がついた釜暴動の恐怖が頭から消えない山対室にとっては運動の側を常に注視せざるを得ないのであろう。この間のたたかいの一定の成果と、運動の蓄積を更に進化、発展させ、仲間を野たれ死へと追いこむ行政に対するたたかいを、アオカンの仲間を先頭につづけていこう。

（２）それにしても 1月 2月は実に多くの仲間がセンターに殺到した。争議団が「センターにどしどし行って枠

をとっぱろう」と宣伝したこともあろうが、アブレ地獄に加え、とりわけても仕事量が減る 1月に、切実さが増した仲間が集中した結果である。「顔付け」で路上手配からはじかれ、センターや職安紹介でギリギリ食いつないでいる仲間にとって紹介数が極端に少ない 1月は大打撃だ。 1月 4日から 6日にかけて大田寮から追い出された仲間にとって待っているのはアオカンに直結せざるを得ない現実である。 1月の第 1週はおよそ 650名程の仲間がセンターから宿泊に行っている。 1月 4日から 7日までは単泊だが、 8日の連泊の日には 300人以上の仲間がセンター前に並び、内 240人が宿泊に行っている。それでもセンターの宿泊からはじかれた仲間が多くあつまったその夜の争議団の炊き出しでは 270人程の仲間が集り、翌日の人パトでは山谷内で 140人もの仲間と出会うなど、センターの宿泊援護など焼け石に水の状況である。山谷をとりまく現状に行政はなんら対応出来ていないのである。労働センターの現金紹介も20前後、職安の紹介も特出しをのぞけば同じく20か30というなかで、運がよかった仲間でさえもセンターの宿泊に月 6日か 7日泊まっただけで残りの日はアオカンを強いられている。この一と月ばかりの間に亡くなった26名もの仲間は行政の無策の上に殺されていったも同然である。同時に不況対策すらとらないこの行政に対して充分に切りこんで行けない運動の弱さも痛切に感じざるを得ない。

形だけの越冬期の応急宿泊援護でさえ 1月の統計数字には山谷の現状が大きく反映している。以下の 2つの表はセンターから我々が調査した資料をもとにして作成したものである。

◎93年 1.2月城北福祉センター相談受付け総数、宿泊、給食援護数及び前年度比

	93年 1月	92年 1月	前年度比		93年 2月	92年 2月	前年度比
受付け総数	4,545	3,056	+ 48.7%		3,425	3,297	+ 3.8%
宿 泊 数	1,955	1,396	+ 40.0%		1,164	1,294	△ 10.0%
給 食 数	1,710	628	+172.3%		1,330	648	+105.2%

◎宿泊が集中した年始、及び週末の宿泊数

月 日	1/4	1/5	1/8	1/14	1/22	2/5	2/12	2/19	2/26	3/5	3/12
曜 日	月曜	火曜	金曜	木曜	金曜	金曜	金曜	金曜	金曜	金曜	金曜
宿泊数	97	104	240	295	165	170	153	110	129	129	161

2月の宿泊数はセンターの締付けの結果前年度より多少減っているとはいえ、受付け総数 1月 2月の計で前年度比で 25.5%増と、越年期の大田寮受付け総数の前年度比での 14%増と比較しても、いかに多くの仲間がセンターに殺到したかが前の表では分かるであろう。 1月から 3月にかけてのこの数値は仕事の出具合と直結する。山谷の仲間の高齢化という現実からセンターの利用者数は年々増加している一方で、この時期仕事が出ない中、仲間がそれに加えてセンターを利用する。

2月15日まで越冬対策として使用している大田寮に加え、春風寮（大田区）自助館（中央区）銀閣（大田区）銀扇閣（渋谷区）新宿荘（新宿区）とセンターと契約している施設はほぼ満杯の状況である。とりわけ昨年 5月から、官公庁の土曜閉庁に伴い行われている金曜からの 3連泊に仲間は殺到する。一日でも多くゆっくりと体を休めたいという仲間の切実な要求の現れである。平日の利用は例えば大田寮閉鎖後の数字ではあるが、

93年 3月 1日（月）	2日（火）	3日（水）	4日（木）	5日（金）
65	48	30	26	129

というように天候などの影響もあるが平均40から50のあいだの仲間が利用するだけである。圧倒的に週末に集中するのである。読売新聞の 2月15日の報道では大田寮の利用は激減しているなどと、御用新聞よろしく山対室

の言い分をそのまま無批判に載せているが、平日の宿泊数を全体像に移し変えるトリックを使ったデマキャンペーンを流し、越冬対策での大田寮の使用を廃止したい山対室の意図に基づいた報道である。行政の都合で週末に宿泊希望者を集中させた結果、宿泊施設が不足し、月に 1回しか連泊は駄目だと規制せざるを得ない状況を自ら作り、多くの仲間から宿泊を遠ざけ、野たれ死にを強制しているにもかかわらず、このようなデマキャンペーンをはるなど許しがたいことである。

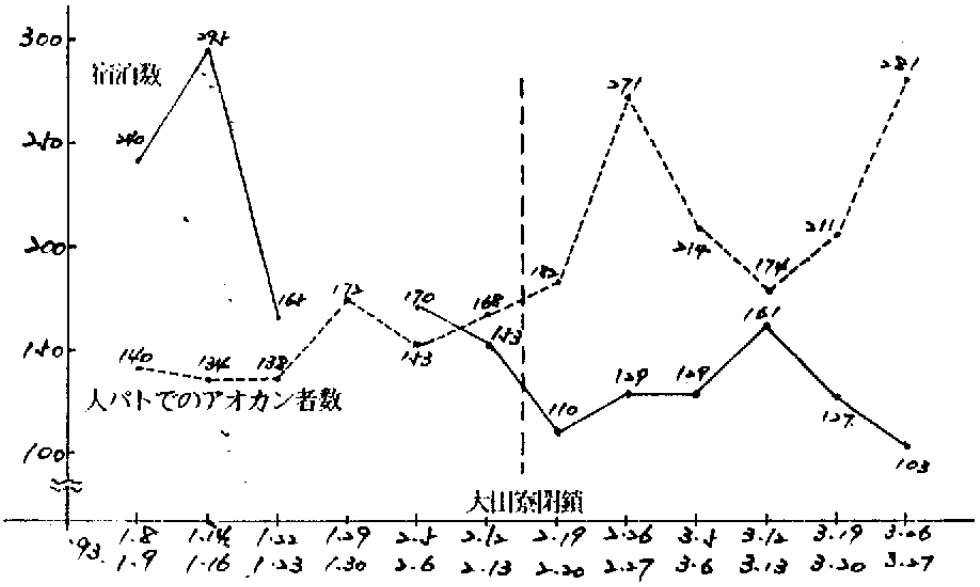
（３）ところで、センターの宿泊はどのような層の仲間が利用しているのだろうか。我々が人パトで通年的に出会っている仲間よりも現役の仲間がとりわけこの越冬期には比較的多いのがその特徴と言えるであろう。これらの層の仲間はアブレ地獄の影響をもろに受けている層である。年始に大田寮がも追い出され、すぐに朝の寄せ場で仕事を探しているが見付からずに止むを得ずセンターにたどりつくという構造で 1月の仲間のセンターへの殺到は始まった。辛うじて一回の宿泊くらいでその後、職にありつけた仲間はいいが、そうでない圧倒的多数の仲間はアオカンをしながらその後も何回も宿泊や給食相談のためセンターに来るようになる。とりわけ路上手配から「顔付け」で排除され、労働センター、職安の現金で求職し、安いドヤに泊まっていたような仲間や、飯場を軸に就労しているような高齢の仲間がこの間多く見受けられる。センター、職安の現金就労は前記したようにこの時期極端に減っており、いまだ回復の兆しはない。しかも前倒しでかなりフルに稼働していた特出しが 3月中旬には切れるという状況のなか、職安を頼りにしている仲間の現状はますます厳しくなっている。当然月に14日も印紙が貼れず、職安の手帳締め付けとも相俟ってアブレの権利さえつかずに、アオカンへと直結する。アオカンにあまり慣れていない仲間は、寒さと、ひもじさのなかでセンターに必死にたどりつくことになる。飯場層の仲間も同様である。年が変わって仕事の回転が進まない状況と、公共事業の大発注にもかかわらず大手ゼネコン 4社は93年度そろって減益になるとの見通しが出るなど、とりわけ民間建築の低迷の長期化が確実化される中で業者は飯場に労働者を大量にストックする余裕はなく、おまけに選別と競争の激化のなか飯場から仲間がなかなか出ないという構造がつよまるにしたがい、ますますそこからはじけた飯場層の仲間は就労の機会を奪われていく。これらの仲間は他寄せ場や、新聞、駅手配などへと流れていくが、いずれにせよ飯場から飯場への間の期間は長期化し、その間アオカンせざるを得ない状況に叩き込まれている。このような中、急場しのぎでセンターに駆込むことになる。高齢者の仲間が多いのは明らかに、路上にせよ、センター、職安にせよ業者の年齢制限での仲間の選別、排除の結果である。まさに建設独占資本の日雇の仲間の使い捨ての最も苛酷な形態である。いままで働いていた者を、ある年齢になると何の保障もなく、路頭に放り出すのである。センターに殺到する現役の仲間の状態はこのような資本の攻撃をあぶり出す。

一方我々が人パトで通年的に出会って来た仲間はセンターをどのように利用しているのだろうか？これらのアオカン歴の長い仲間の一部はある意味ではかなり「したたか」にセンターの宿泊や給食を利用している。センターの「基準」にあわせて自分が宿泊にいける日を選んで月に何度かの風呂や洗濯が目的で宿泊に行く仲間も多い。率先して給食や物品（衣料等）援護を自らの要求にあわせて求めるのもこれらの仲間である。又センターの 3階が彼等のひとつの社交場ともなっている面もある。職員に文句をいったり、「なれあったり」するのもこれら何回もセンターを利用している仲間が多い。多方、我々の山谷人パトでの聞き取りではセンターの利用頻度はかなり少ないという結果が現れている。宿泊が集中する週末に人パトを行っていることと関連し、宿泊からはねられた仲間が多いということがあろうが、山谷周辺で通年的にアオカンをしている仲間は、センターとはかなり距離があるということが推定される。これらの仲間より浅草や隅田公園など、周辺部でアオカンしている仲間の方がかなり頻繁にかつ計画的にセンターを利用しているようである。法外援護はなんらかの法に基づいている訳ではないので、一定の「基準」も含めかなり恣意的な運用が行われている。その結果センターから日常的に排除される仲間の層が形成されることになる。宿泊援護でいえば、例えば何年前であろうと飯場などへ行く交通費をセン

ターから借り、まだ返済していない仲間はまず宿泊は断られる。たった 300円か 400円のためにである。また宿泊施設でなんらかの「問題」をおこしたような仲間は永遠にその施設へは「出入り禁止」である。交通機関を間違えたりして施設にたどりつけなかったり、無断で施設から出ていくようなことになった仲間も、そんなことを繰返してしまうと宿泊は容易に出来なくなってしまう。職員の対応も個々バラバラのため「センターの求職カード作ってこなければ駄目」「自手帳を作ってこなければ来月は宿泊させん」などと言ってくる職員もいる。給食援護も自分がもらったパンなどを人にわけると一周間の給食援護の禁止などという一方的な「きまり」までもがある。おまけに一日の宿泊を得るために朝早くから昼すぎまでかかるという風に役所手続きは繁雑さを極める。このようなセンターの「規則」の押しつけと、窓口の高さのため多くの仲間がセンターの法外援護から排除されていく。山谷の通年的な仲間がセンターを気軽に利用出来ない原因はこのように存在している。法内援護からも排除されている、とりわけ何度も病院の入退院を繰りかえしているような山谷の仲間は、自然とセンターから足が遠のき、法外援護からも同時に排除されてしまう訳である。

次の表は越年後の週末のセンター宿泊数と土曜人パトで出会ったアオカンの仲間の数を比較したものである。大きく見ると、われわれが通年的にまわっているコースで出会う仲間の数の変動と、宿泊数の変動との関連は、宿泊数が押えつけられるにつれ、アオカンの仲間が急増するという具合におおよその反比例はしている。センターの宿泊制限が多くの仲間をアオカン・野たれ死にへの道へ叩き込んでいることが証明されるだろう。山谷のアオカンの仲間の急増に対しては、大田寮閉鎖後のセンターの宿泊援護の現状ではますます対応が不可能となっている。大きな点からは上記の通りであるが、変動値の対比を見ると必ずしも平均化しておらず、センターの宿泊は山谷内の仲間の動向の 1つの要因としてはあるが、絶対的に大きなものでもないということも分かる。これは前記したような山谷内の通年層の仲間がセンターから排除されている構造を現わしている。

《》センター宿泊数と人パトで出会ったアオカンの仲間の数の対比



いずれにせよこのアブレ地獄のなか多くの仲間がセンターの宿泊を求めて集まって来ている。宿泊や、センターに対する怒り、不満、要求もまたこのような状況のなか高まっている。仲間に聞いてみても、現役の仲間は「仕事があればこんな所なんかに来ない。仕事に行く気があるのかないのかなどと、つべこべ文句言うんだったらセンターで仕事を紹介すりゃいいじゃないか」「困ってるから来てるんだよ。困ってる奴をどうにかしようっ

てのが福祉じゃないのかね」、何度も利用しているような仲間は「銀閣、銀閣は洗濯がタダじゃないし、弁当もほか弁で量も少なくてまいっちゃうよ」「銀閣だけは布団がきたなくて行く気がしないね」「月に一度じゃなくて毎週泊まれれば天国なのにな」などと千差万別の声がそれぞれの置かれた状況にあわせて返ってくる。これら様々な声をひとつにすぐさままとめ上げていくのは至難の技だが、いずれにせよ、これら宿泊に来ている仲間の声、また様々な事情で宿泊から排除されている仲間の声を汲み上げ、仲間の力でどのようにセンターの宿泊を変えていくのか、どのような福祉、援護をセンターに求めていくのかを根気強く論議し、仲間全体の利益になるような要求を作りあげていかなくてはならないであろう。

（４）山対室による越年後の越冬対策の特徴は、宿泊の枠の拡大を用意していたことと共に、通常潮見寮から通院しているような病弱者、高齢者の仲間を大田寮に押し入れたことだ。越年・越冬対策用の法外援護宿泊施設の大田寮に、準更生施設の潮見寮に入るべき仲間を入れることにより、その境界線をあいまいにし、行政の側が自ら混乱を起こして来ている。福祉課長の小山が言うには、「12月 1日から 3月31日まで潮見寮を設置し、病弱者の生活保護の適用を行っている…病弱者以外の高齢者に関しては今年は大田寮も活用する。福祉事務所が大田寮で200 名の枠を確保してある」とうことだが、その結果、 3月一杯まで潮見寮があるというのに 2月15日の大田寮の閉鎖に伴って多くの仲間が放り出されるという事態が発生した。20名近い仲間が出されたらしい。全員をホローした訳ではないが、継続治療が必要な仲間はもう一度福祉へ行かなくてはならないなど、面倒な手続きのおかげで、治療も終えないうちに住む場所がなくなり、再びアオカンせざるを得なくなっている。なかには 1月 6日から 2月14日までなんの治療もされずに、大田寮にいた仲間も人パトで出会っている。この行政の身勝手な対策変更が及ぼす仲間に対する悪影響については追跡調査が更に必要であろう。また、 3月12日の宿泊においては潮見寮を今度は法外援護の宿泊施設に使用するなどという事態もおこっている。およそ30名くらいの仲間が潮見寮に割りふられた。小山は「今日は午前中雪が降り、センターに見えられる方が大勢いましたので、山対室に頼んだ所、潮見寮が使えるということだったので、お願いして急遽使わせてもらった。今回の処置は天候による特別な処置で、とりわけて越冬対策というものではないので今後つづけるという訳ではありません。いずれにしてもこういう天気ですので我々としても出来る限り精一杯のことをして利用者の方の期待に添うような努力をしているつもりです」などといけしゃあしゃあ言っているが、 3月末の閉鎖を見すえて潮見寮からすでに30名以上の仲間を放り出されたということであり、目につかない所で病弱や高齢の仲間を路頭に追い出し、野たれ死にに追い込んでおきながら、一方でそのあいた枠で新たな収容を行なうことによって、いかにも山谷の労働者の「更生の助長と福祉の増進」を図ることに誠意努力しているかのようなポーズをとるといった行政の巧妙な政策が見うけられる（ちなみに潮見寮は 3月30日に80名ちかい仲間がたった 3,000円を渡され、施設が閉鎖だから「これで頑張ってくれ」と一方的に放り出された）。

この間の行政の対応で一貫しているのは法内であろうが、法外であろうが、施設の色分けに関係なく、社会的に問題にならない程度にとにかく収容してしまおうという態度である。収容をしたという実績を作ってしまえば、その後仲間を放り出そうが、何しようが勝手という訳であり、闇から闇へと仲間をアオカン・野たれ死にへの道へと追いこんでも行政としてはやることはやったと胸を張って責任逃れが出来るのである。社会的関心や運動の側がこの収容の枠という入口の所で止まっている限り、行政の巧妙な政策の中、収容はされるが、その一方仲間が人知れず次々と野たれ死にへと追い込まれていく構造には風穴はあけられない。行政に対する直接的なたたかいと共に、野たれ死にを許さない人パトを、潮見寮などから出された仲間が多くなるこの 3.4月、強化していかなければならないだろう。行政の野たれ死に攻撃を撃つあらゆる領域のたたかいを仲間の力を背景に作りあげていこう。

（文責　K）

上野人パトの報告

越冬後段（越年明け～３月末まで）

① 越冬後段上野人パトでのアオカンの仲間の数

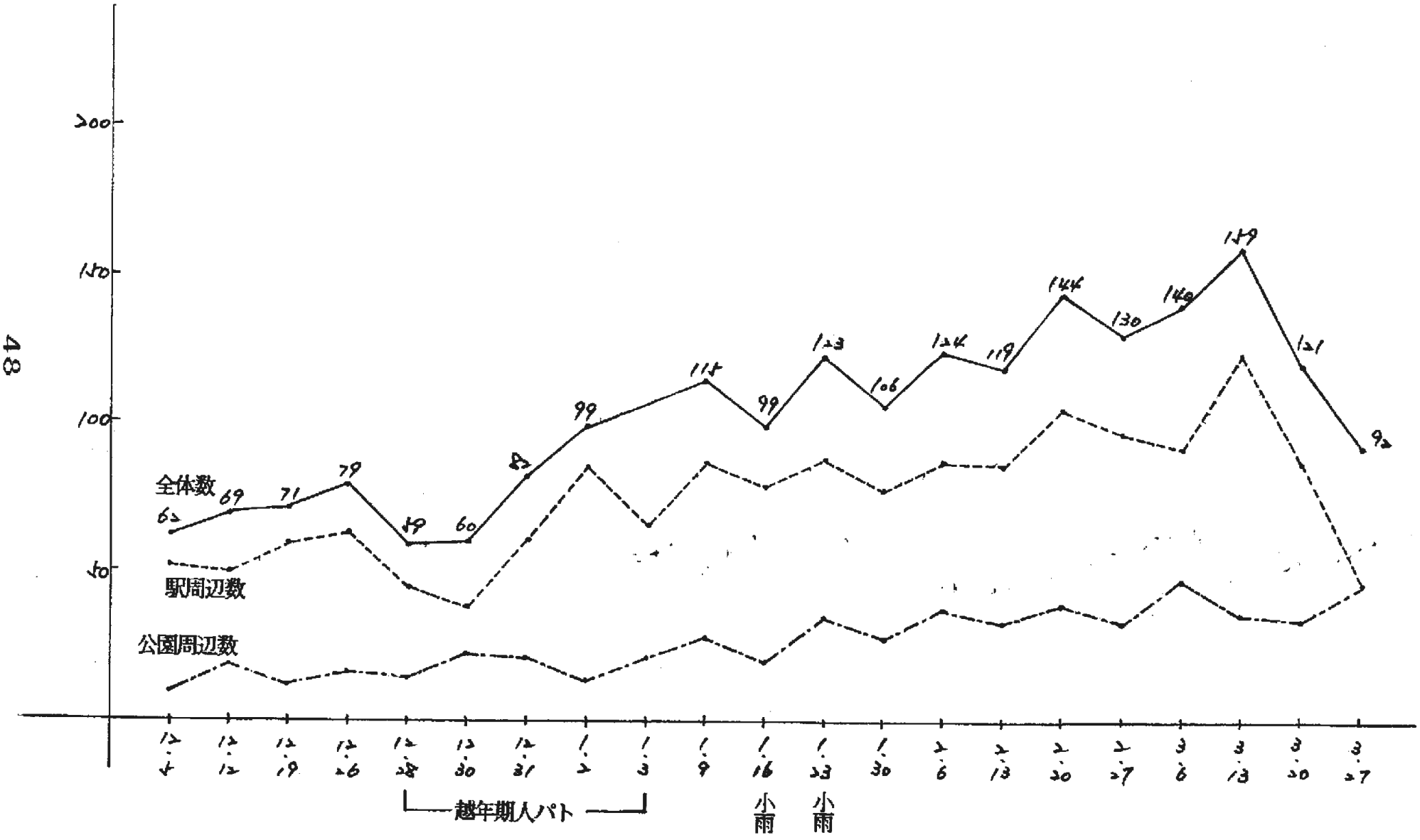
	1/9	1/16	1/23	1/30	2/6	2/13	2/20	2/27
ＪＲ地下道	39	71	64	58	80	65	62	71
京成地下道	19		8			15	27	6
その他地下	8							
階段	12		7	6			3	3
広小路口週辺	3		0	5				8
浅草口	0				2			
入谷口通路	5	6	4	5	4	2	13	8
岩倉高校前	1		1	3		3		0
映画館前	0	2	4	1	1	1		1
駅周辺数	87	79	88	78	87	86	105	97
文化会館	7	14	13	10	12	10	9	11
美術館	0	2			1			
博物館	2	0	0	0	0	0	0	0
サイクリング	7	2	7	6	5	6	3	4
ベンチ	4		7	3	8	5	13	6
噴水周辺	0		1		2			
池の端	4		3	4	0		1	5
崖					5	5	8	2
西郷像周辺	4	2	4	5	4	7	5	5
公園周辺数	28	20	35	28	37	33	39	33
合計	115	99	123	106	124	119	144	130

	3/6	3/13	3/20	3/27
ＪＲ地下道	56	86	25	26
京成地下道	8	8	26	4
その他地下			9	
階段	10	9	8	1
広小路口週辺	5	6	12	
浅草口		1		4
入谷口通路	7	7	7	5
岩倉高校前	1	3		3
映画館前	5	3		3
駅周辺数	92	123	87	46
文化会館	11	12	11	13
美術館		1		
博物館	0	0	1	1
サイクリング	5	5	4	9
ベンチ	8	3	5	9
噴水周辺		1		
池の端	10	5	3	8
崖	8	3		1
西郷像周辺	6	6	10	5
公園周辺数	48	36	34	46
合計	140	159	121	92

（平均値）

／93年	1月	2月	3月
駅周辺数	83	94	87
公園周辺数	28	36	41
合計	111	130	128

★資料　上野人パトで出会った仲間の数の推移<越冬全体>



② 数値から見えてきたこと ならびに越年後の上野の状況

年末に駅手配飯場層の仲間の流入によりアオカンの仲間が急増した上野では、越年後も日を追うごとに仲間の数が増え続けている。越年期５回の人パトで平均75人の仲間と出会った訳だが、これが１月平均 111人、２月平均 130人、３月平均 128人（3/27日の数値は花見との関係で仲間が散らばった状況の数値である）というようにこの短期間の間にほぼ倍増している。去年の同時期の平均が43人であることを考えればおよそ３倍以上の増加ぶりである。駅、公園別に見ても、その双方において同様に急増しているが、目を見はるようになったのは、我々人パト班が到着する時間帯になるとＪＲ地下道には炊き出しを待つ仲間の列が出来ており、炊き出しの準備をしているうちに、呼び掛けをするまでもなく50～60の仲間が自然と集まってくるなど、とりわけ地下道での仲間の増え具合である。これらの仲間の全てが地下道でアオカンしている訳ではないが、主要には炊き出し目当てに多くの仲間が土曜日の夜には集まって来る構造が出来あがっている。 3月半ばで終わったが月、金の救世軍の炊き出しとセットとなって土曜日の夜の我々の人パトが、上野やその周辺でアオカンをする仲間にとってその生活の一部になって来ているようである。昨年から一年間を通して行なって来たことが、この不況下のなか厳しさが一層ましている仲間にとって完全に定着して来たということであろう。

それにしても上野の仲間の急増ぶりには驚かされる。新宿などは越年後減少傾向となっているにもかかわらず、上野に関しては単なる一時的な増加ではなく、まさにだるま式にふくれあがっていると言ってもいい状況である。地下道での炊き出しに関してもズンドウ一つで足りていたのが、今では二つのズンドウでも足りず、食数は 100を越えているし、ダンボールに入れた衣類などもアッと言う間にカラになってしまう。上野人パトの定着化というだけでは分析しきれないのである。

越年期は見るからに飯場層だと分かる、仕事バックを持ったいつも見かけぬ仲間が地下道に多くいた。越年期に上野の仲間の数が相対的に増えたのは、明らかに年末飯場を閉められた駅手配飯場層の仲間の流入が原因であった。駅手配との関係でこれらの仲間がどう推移するかが越年後上野人パトの大きな注目点であったが、これらの仲間の内、若い仲間はまっさきに飯場に入るかしていなくなりはしたが、高齢の仲間は未だ停滞している状況がある一方、大田寮から戻って来た上野の通年層の仲間、山谷や他寄せ場から流れて来た新しい仲間などがその上に組み重なり、かなり仲間の層が多様化して来ている。その結果ポイントになる筈の駅手配飯場層の仲間の推移の分析が困難になり、増加する仲間の対応に追われるのが精一杯で、仲間の増加の原因が未だ正確につかめていないのが実状である。しかしかなり確実な所で推論出来る事は、山谷の仲間の上野への流入ということである。何年も上野に定着してアオカンしている仲間は減りはするだろうが増えはしない。 1.2月は福祉は狩り込みをしていないことからこの仲間の増減に関してはほぼ現状維持であろう。駅手配飯場層に関しても越年期以降それが大幅に増えたという形跡はない。その一方よく目につくのが山谷でよく見かける仲間の姿である。浅草の仲間が炊き出し目当てで上野まで来ることがあるが、毎日どこかの団体が炊き出しをやっている山谷の仲間が上野まで炊き出し目当てで来るということはあまりないだろう。これら山谷の仲間が山谷と上野を行ったり来たりしているのか、それとも上野に居つこうとしているのかなどは聞き込みの不足で実態は分からないが、いずれにせよ大きな視点から言えば、山谷の仕事量が年を明けても回復するどころかますます減少しているなか、周辺駅への山谷の仲間の分散化がより一層進行している結果として、上野の増加が現象しているのではないかということである。いままで不況下の傾向として語られてきた分散化という事態が数字の上にはっきりと刻印されるほど山谷の仲間の流出が生じて来ているのではないだろうか。山谷の人パトで出会う仲間の数は減ってはいないのを考えると、この年明け不況の波の中、いままで以上の多くの仲間がアオカンの列に叩き落とされ、ある者は山谷に残る一方、かなりの仲間が他寄せ場や周辺駅へ仕事を求め移動していることがうかがえる。

その他の原因として地方からの出稼ぎ層ということも考えられるが、それは若干あるのだろうが見た目にはそれほど多いとも思えない。いずれにせ現段階では山谷もしくは他寄せ場からの主要には仕事の面が原因での流入として推論出来るのではないかと考える。この点については聞き込みの強化のもと実態を明らかにする必要があるであろう。

③　上野駅手配について

この越年期の周辺・広域の大きな傾向として駅手配飯場がクローズアップされ、ケタオチ故に年末放り出された結果アオカンに直結せざるをえず、かつこの不況下で再度飯場に行ける保障もない駅手配飯場層の仲間と多く人パトを通して出会ってきた訳だが、年明けこれらの仲間がどのように推移するのか、それとの関係で駅手配の構造、実態の調査を越年後上野人パトでの大きな柱とし、この点での聞き込みの強化を位置づけて来たが、上記したように上野の仲間の増加と多様化のなか体制が取りきれず、及び、仲間の口が堅いということもあり、実態を明らかにするという所まで至っていない。それでも聞き得た所で判断すると以下の通りである。

（１）上野手配は山谷同様 1月期は若干しかなかったが、 2月 3月と少ないながらボチボチと仕事は出始めている。どれほどの手配がかかっているのかは不明であるが、若い層を重点的に選んで手配をする傾向が強まっているようである。「年をとっている（50才）」という理由で顔見知りの手配師から排除されたという仲間の声は何度か聞いた。
「トミケンのワゴン車は毎日来てるけどあまり乗せていかないな。手配師が人を見てるみたいだから」（文化会館の仲間）「沢田（手配師）は毎日来てるよ。若いの選んで連れてくな」（浅草口の仲間）など飯場からの高齢者、病弱者の排除は山谷同様の傾向としてあるようだ。その結果越年期で出会った駅手配飯場層の若い仲間は年明け早々にいなくなったが、年を取った仲間が駅や公園に停滞する結果となっている。

（２）上野駅手配業者に関して依然口は堅いが、前よりはかなり聞けている。以下列記すると、
「駿河技研」静岡県に飯場。社長自ら公園で手配。賃金不払いのまま仲間を追い出す。
「トミケン」ヌキ7,000 円、文化会館周辺で手配。向島に飯場 60 人くらい。
「杉本」ヌキ5,000 円、勝田台に飯場　40人くらい。木造解体
「向井、原田班」とび手元で10,000△1,800 綾瀬に飯場
「元向井の日昭建設」東新町に飯場　駅手配　5-6,000 円△1,500 ～2,000 円
「向井、相沢班」文化会館、駅手配　6,000 円△諸式
「向井、小林班」駅手配。5,000 円△1,500 円
「あずま」駅手配、ヌキ9,000 円
「富永建設」駅手配、ヌキ4,000 ～4,500 円　梅島に飯場　80人くらい。
業者名不明だが公園手配の現場に入飯したが、会社が 1月につぶれて賃金がもらえず。

（３）駅手配の「飯場制度」の実態に関しては業者までは話してくれるが、それ以上の聞き込みがかなり難しい為あまりつかめてはいない。それでも数少ない仲間のうち「富永建設」の話をしてくれた浅草口の仲間は次のように語ってくれた。「鼠馬ですっちゃって、飯場に帰れないから今日アオカンして、明日手配師が来るまでの辛抱さ。今は道路工事とかの石関係の仕事ばかりだね。L字溝とかのあれだよ。飯場は80人くらいいるな。結構でかいよ。だいたい上野からだね。手配も毎日じゃないけど２日に一遍くらいは来てるな。部屋は最低さ。20人部

屋でザコ寝みたいなもんだな。公共事業ばかりだから結構仕事あるんだけど、それでも仕事が切れることはしょっちゅうあるよ。俺なんかもひどい時には週２回か、３回は休んでくれって言われたこともあったし、それでも飯代とられるんだからたまんないよ。毎日出る奴は出てんだけどね」

飯場内アブレなど巨大飯場での「飯場支配」とも言われる実態がある程度かいま見られる。この先輩もずっとこの「富永」の飯場にいると言う。債務奴隷のような飼い殺しとも言うべき状況に構造的に追い込み、低賃金でこき使っていく駅手配飯場がこの不況下ます目立ってくるであろう。

④　「狩り込み」「山狩り」について

例年以上に上野でアオカンする仲間の数が急増していることは公園課を通して台東福祉は把握しているだろうが、12月22日の狩り込み以降 1月 2月と上野においては「狩り込み」を福祉は実施しなかった。我々がつかんでいるだけでも今年に入ってから 1月 5日に文化会館付近で１人、2 月25日に文化会館裏で２人、野球場のベンチで１人の仲間が亡くなっている。また警官が「今年に入ってから公園で死んだ人は13人だ」と言っていたとの仲間の情報もある。いずれにせよかなりの仲間が公園や駅周辺でこの寒さの中、死んでいる状況を当然、福祉はつかんでいる筈であり、建前上も「狩り込み」を実施する要件は揃っているにもかかわらずである。施設や病院が一杯でやりたくても出来ないのか、それとも行政の側で例年以外の上野対策が働いているのか、この動向をどう見るかは今の段階では確定できないが、気にかかる動きではある。その一方、警察と公園課はかなり頻繁にこの間「山狩り」を実施している。この「山狩り」は警察と公園課が基軸となり基本的には荷物の撤去＝「清掃」を主眼とするものである。上野の荷物の撤去は山谷周辺の公園の場合とはかなり違い、事前の警告などなにもなく、行政の勝手な都合で実施している。公園利用者の苦情などがあればすぐに行なうとの話もあり、その実施は不定期であるようである。時間帯に関しても昼間、夕方とまちまちであるが、「狩り込み」のように夜は行なっていない。撤去に関してはかなり強引に行なわているようだ。持主がそばにいれば注意されるだけだが、持主がいない場合の荷物はすべて全てゴミとなり即座に処分される。ブルーシートなどでテントを張って生活をしている仲間は特に狙われやすいという。いずれにせよ昼間毛布などを公園の中に確保している仲間の荷物はほとんどその対象となってしまう。とりわけイラン人の仲間の荷物に被害が多い。昼間仲間が動いている時間帯に行なうことからして追い出しに関してはあまり実際的な力とはならないだろうが、荷物を勝手に処分させられる恐怖を仲間の間に植えつけることによって間接的な追い出しとして機能している。この「山狩り」が頻繁に行なわれている原因として、皇族ないしは政府要人が文化会館など公園内文化施設を訪れることがこの間増えている事、入管の摘発と一体となって警察が上野からのイラン人追い出しを強めている事などが考えられるが、福祉が「狩り込み」を 1.2月と行なっていないことと「山狩り」が頻繁に行なわれていることとどう関連しているのか行政の対応には今後注意を払うべきであろう（ 3月25日にようやく福祉は狩り込みを実施した。これは完全に花見対策でもある。仲間の話しによると50人ばかりの仲間が持ってかれ、内 8名ほどが帰ってきたという。今回は福祉が中心となり、警察によるダンボールの撤去はなかったらしい。それにしてもかなりの数の仲間を一挙に持っていったものだ）。

その他ＪＲ地下道などでの追い出しは、京成地下道において 2月の始めに消毒を実施した程度で特別に新たな情報は聞けていない。

⑤　上野のイラン人について

昨年末以降上野に集まるイラン人は、数的にはかなり減っている。夜の段階でいつもの西郷像下の階段周辺に

集まるイラン人は50～60程度で、上野公園内でアオカンをしているイラン人は10～20程度だと思われる。昨年の11月から追い出しを目的とした公園内の植栽工事は 2月13日前後に終わり、京成口上の植木内には人が入れない状態が完了した。又、上記したように「山狩り」による荷物の撤去で毛布など荷物が捨てられる等の被害が続発するなどの明確な公園課による追い出し、及び、偽造テレカ、麻薬関係での取り締りを入管と連動しながら警察がこの間集中的に行なっている。これらの影響そして、製造業など外国人労働者を雇っていた企業がこの不況の中で彼等をまっさきに解雇するなど、仕事の面からの影響などにより、上野ではイラン人の仲間が減って来ているものと考えられる。それでも人パト時には労働相談などがかなりの数まいこんでくる。これらは人パト班では対応出来ず、一緒にまわっている在ア共などの団体にまかせきりの状態だが、土曜日の人パト時の話しから月曜日の在ア共会議につながるのがほとんどないらしい。外国人労働者の労働相談の難しさを感じさせる。彼等の抱えている問題として依然医療問題も大きな側面である。その他公園課による「山狩り」の影響で毛布、荷物などを取られた仲間から毛布や衣料品の要求が最近特に強まっている。

その他新たな発見ともいえる事は風邪を引いたイラン人をセンター 2階に山谷の仲間が連れてきた結果、診断をしてもらい、薬をもらって帰ったことだ（3/19）。センターの医師によると「以前にもイラン人はきたことがある。国籍は関係ない」とのことであり、医療要求のある外国人労働者のセンターの利用ということも、今後考えてもいいのではないか。

⑥　今後の上野人パトの課題について

端的に言ってこの間急増する仲間に対していかに有効に対応するかということが課題であろう。医療・福祉対応が必要と思われ、継続的な話し込みをしている仲間は数名いるが、急を要するような仲間とはこの間出会えていない。仲間の急増ぶり、そして福祉の「狩り込み」のサボタージュのなか、仲間の置かれている現実は想像以上に厳しいものがあるだろう。越年後に公園内で亡くなった多くの仲間の現実がそれを示している。山谷の場合と同様、上野でも福祉に行きつかない仲間はかなりの数いる。なおかつ「狩り込み」という強制入院以外の福祉にかかる機会が上野の仲間は山谷の仲間よりも奪われている。これらの仲間にたどりつくには、こちら側のスタンスの問題、体制の問題が大きく規定している。炊き出しをひとつの契機とした仲間との話し込みを強化し、長年のアオカン生活からくる仲間の体の変調などをつかみ、医療、福祉の活用など生きていくための方向を語りあい、大きく言えば、資本、行政の野たれ死に攻撃を許さず、仲間とともに「生きて奴らにやりかえす」たたかいを作りあげられるような関係を是非とも作りあげていかなくてはならないと思う。及び緊急医療を要すると思われる仲間と出会えるようなパトロールをこれまでの人パト班の地平を継承して確実に行なっていこう。それのみに止まらず、アオカンの仲間が置かれている現状と、行政側の政策を分析しながら、主要には追い出し、地域の排外主義と対決していくこともまた同じく必要である。また、駅手配のケタオチ業者、「飯場制度」の中で資本が駅周辺の仲間に強制している今日の攻撃を撃つために、その現実を仲間との話し込みのなかから掴み、今後のたたかいの為の材料を確実に見つけだすことも継続して行なっていく必要があるだろう。またイラン人との関係についても、我々の出来る範囲のことを継続していかなくてはならないだろう。いずれにせよ仲間が急増し、様々な層の仲間が集まった上野においては、様々な事態が発生する余地が充分にあるし、また仲間の要求の声も様々上がってくるであろう。体制的にあがった問題全てに対応出来るような状況ではないが、少なくともそれに対応するだけのこちら側の心構えだけは作っておかなければなるまい。

（文責　K）

アオカン（野宿）を強いられている労働者の類型化について
（試論）

日雇労働者がアオカン（野宿）せざるを得ない主因として、建設独占資本が日雇労働者を、不安定就労雇用＝日雇いおよび短期契約という雇用形態のもと、重層的下請構造を介して就労過程を杏恣的に管理できる労働力として位置づけていることにある。資本の必要な時にだけ就労させ、必要がなくなると切り捨てられる雇用調整弁として存在していることにある。

建設独占資本にとってこの雇用調整は、重層的下請構造のなか社会的責任も追及されることなく貫徹出来る。アオカンを強いられている労働者の存在は全て本人の就労意欲の問題として社会的に認知させることにより建設独占資本の道義的責任は闇から闇へと葬り去られるのである。また行政もその補完物と化し、建設独占資本の「いらなくなった労働力」を福祉行政の名のもとに、再生産するかもしくは人知れず「処分」していく。病院資本もアオカンを強いられている労働者を自らの食い物にし、肥え太って行くことにより、行政、建設独占資本と結託している。

アオカンを強いられている労働者の存在は（主要には）建設独占資本の労供体制の現実をもっとも露骨にあぶり出している。景気循環にあわせた使い捨てという建設独占資本が日雇労働者に強制している雇用形態の、その局限的な状態がアオカンという日雇労働者の生活様式である。

建設独占資本の労供体制の特殊性から必然的に生み出される失業者、半失業者（停滞的過剰人口）の群れがとらざるを得ない生活様式がアオカンという生活様式である。

建設独占資本が日雇層を一定数プールさせておくことがその産業に課せられた使命である限り、寄せ場機能は必然的な産物であり、また、景気変動に伴う雇用調整がある限り、そこから生み出されるアオカン層労働者もまた必然的なものである。

日雇労働者がアオカンせざるを得ない主因として、次にあげられるのがその日の労働力を再生産する条件しか与えぬ低賃金制度であり、それを根拠とした「寄場制度」「飯場制度」といわれる労働力の囲いこみに伴う生活過程全般にわたる資本の収奪である。生涯賃金を比較するまでもなく日雇労働者の賃金格差は他産業の長期雇用労働者に比べ圧倒的に大きい。重層的下請構造のなか小ブルやヤクザの数々のピンはねを受け、そして手にしたわずかな金もドヤ主を始めとする寄せ場に寄生する小ブルに吸いとられていく。また景気の変動という目にみえぬ怪物のせいで最低限の生活の計画性すら奪いとられていく。「寄せ場」や「飯場」に入った段階から、「単身者性」と「移動性」そして、その日暮らしという生活様式を資本の要請から強制させられる。資本に都合のいいドヤ暮らし、飯場暮らしという生活様式を身につけさせられるのである。他産業の失業者がアオカンという形態をとらない理由として、資本から強いられている生活様式の違いが挙げられるであろう。他産業の労働者がアオカンにいたるまでは様々な経過点を通過するであろうが、日雇労働者からドヤや飯場をとれば、すぐさまアオカンに直結する。

次にアオカンを強いられている労働者の特殊性として、それが日雇労働者の失業者、半失業者であることから起因して、その生活地帯は就労過程の経路周辺の場所であるということにある。寄せ場であり、また飯場の経路でもある主要駅である。またその移動に関しても同様である。

アオカン層労働者が他産業の失業者群と違うのは、日雇という生活様式を強制されている以上、他産業への移動は極めて困難であるということである。それが可能であった所で日雇という雇用形態のもつ労働集約型産業であり、その生活様式においては変化がない。これらアオカンを強いられている労働者は再び、建設独占資本の使い捨て可能な自由な労働力として資本の搾取を待ちうけることとなる。しかしアオカンを強いられている労働者

の労働力の価値はドヤ住まいや、飯場にいたころとは違い当然下がっている。アオカン層労働者は自らの労働力を安値で切り売りすることになる。このほか経済外的強制としてヤクザの中間搾取がとりわけ駅周辺を居住地とするアオカン層労働者に対して襲いかかる。前近代的な低賃金の強搾取のもと酷使され、その労働力の再生産が不可能になるまでこき使われ、そして再び資本に「いらなくなった労働力」として放り出され、その最後に「敗残兵」の烙印を押され、野たれ死にを強制させられる。

アオカンを強いられている労働者は建設独占資本の日雇労働者のつかい捨ての産物であることを社会的には認められない。資本と行政が結託した棄民化攻撃のなか、労働意欲のない「浮浪者」「怠け者」としてその責任を個人に集約させ、社会的な抹殺の対象としてキャンペーンする。これは資本の雇用責任と行政責任を隠蔽するためのものである。その結果アオカン強いられている労働者は地域の排外主義の矢面にたたされ、狩り込みや追い出し、そして襲撃の対象とされることとなる。

アオカンを強いられている労働者がおかれている現実はその生活様式からくる身体の消耗と、社会的な差別、そして就労機会の剥奪と、タコ部屋への道か、野たれ死にへの道である。

不況のおりアオカンを強いられる労働者が増大するのは必然的な事態である。しかし、使い捨てという建設独占資本の日雇労働者にかける本質的攻撃のため、景気循環にかかわらず、労供体制の質的変化などの理由によりアオカン層労働者は常に排出されることになる。建設独占資本が高度経済成長時に量的にも質的にも大量に寄せ場にプールさせた日雇労働者群の高齢化という事態に今日直面している。「単身者性」を機軸に労働者をプールさせてきたことによりその人的再生産は行なわれず、日雇労働者は高齢化の一途をたどっている。この高齢の日雇労働者に対して資本はなんら対策をせず、切り捨ての対象とし、容赦なくアオカンの隊列の中に叩き落とす。苛酷な労働の結果「障害」を持たざるを得なくなった仲間も同様であり、また労働意欲をそぎ落とされた仲間もまた同じである。これらの部分は年々身をすり減らし、寄せ場や駅に沈澱し、ヤクザ資本の餌食となるか、野たれ死にの運命を強制される。建設独占資本の側は年々先細るプールした労働力に見切りをつけ、産業合理化、技術開発により人件費の削減を実現し、また、大量な労働力が必要な時は農村からの出稼ぎ層や、アルバイト層、外国人労働者など新たな労供体制を組み立てることにより乗り切っていく。

不況時においてはアオカンを強いられる労働者の排出は恐るべきスピードでなされる。建設独占資本は人件費の削減をその第一目標として掲げる。重層的下請構造のなか日雇層を直接雇用する中小資本はその煽りをうけ忠実に独占資本の意志を実行する。労働の質を彼等は問題にしはじめ、「優良な労働力」「資本に柔順な労働力」の確保に血眼となる。「顔付け」「直行」または飯場内での囲い込みの構造が支配的となる。また足元を見れる状況の中、現場においては低賃金、労務支配の強化、強労働、強搾取が一般的となる。ここにおいて資本の意志から外れる労働力は情容赦なく排除されることとなり、すぐさまアオカンの列に叩きこまれる。

これまでアオカン層の圧倒的多数が日雇労働者層であるという観点から問題を設定してきた。個別例外ケースは多々あろうが、個別特殊ケースを一般化するためにも次にアオカン労働者の階層区分を試みてみたい。基本的にはこの間の人パトで我々が接し、見えてきた現実からの区分化である。

①「通年アオカン層」

労働の機会がまったくないか、自ら放棄している部分。かつては日雇層として働いていたが、事故、病気、高齢化などの理由で資本の側から排除された部分。もしくは労働意

欲をそぎ落とせれた部分。その生活の根拠は、仲間への「寄生」と炊き出しなど民間の福祉活動、および拾い食いなどをもってなす部分。かつて行政にも依拠していたが、行政の側から「ブラックリスト」に載せられ拒否されている部分、もしくは行政に頼るという意識がない部分。

②「通年現役アオカン層」

週1.2 回の労働、もしくはバタヤなど辛うじて生きていく収入源をもち、これを基本としながら通年的にアオカンしている部分。身体的理由などにより、資本の側から排除された部分ではあるが職安の手帳などによりわずかな就労が可能となっている。自らの生活スタイルをもち、炊き出しや、行政も補助的に利用している部分。

③「現金現役アオカン層」

現金就労を主としている部分で、好況期にはドヤに泊まれる程度の現金就労に就いていたが、不況期、もしくは強まる年齢制限などにより、仕事に行く頻度が減少しアオカンせざるを得なくなった部分。就労意欲はありアオカンしながら朝の寄せ場に立ち、見切りをつけると寄せ場から寄せ場へ、また駅、新聞などから飯場へ入っていく部分。炊き出しや、行政も補助的に利用している部分。主要には寄せ場の現役アオカン層。

④「飯場現役アオカン層」

飯場就労を主としている部分。飯場から飯場へと渡り歩き、その中継点として、寄せ場や駅に立ち止まり、次の飯場を見つける部分。次の飯場を見つけるまでの期間が長期化するに従い、アオカンせざるを得ない状況が増す。また駅手配のデズラでは飯場から帰ってくるなりアオカンせざるを得なくなる。炊き出しには集まるが、行政に関しては殆ど利用しない。主要には駅の現役アオカン層。

⑤「出稼ぎアオカン層」

様々な事情で地方から流れ、就労の機会を探すが見付からず、アオカンせざる得なくなった層。かつて日雇層ではなかった部分が多い。農村出身者、工場労働者など。この部分は日雇層、とりわけ駅飯場層の予備軍と化することが多い。

⑥「潜在的アオカン層」

寄せ場の現金就労などが基本で、ベッドなどの安いドヤに泊まっているが、センターの宿泊や炊き出しなどで、辛うじて生活が成りたっている部分。この部分も寄せ場に見切りをつけると寄せ場から寄せ場へ移動し、また駅、新聞などから飯場に入っていく層

⑦「街頭生活アオカン層」

労働意欲を何らかのかたちでそぎ落とされ、繁華街が排出する残飯などに依拠して生活をしている部分。かつて日雇層でなかった部分、経済的理由または家庭の事情など様々な理由で自らの経済基盤から逃げて来、都市、街頭での生活を営んでいる層。

実態的にいうと①の部分は山谷や上野でわれわれが通年的に接している部分。②の部分は周辺の隅田公園や銅像堀などの仲間③の部分は昨年から山谷のなかで仕事バックをもってアオカンしている所を出あうが、翌週にはもういなくなっているような部分④、⑤はこの越年期に上野、浅草、新宿でであった駅での部分ということになる。センターの宿泊利用者は②、③、⑥の部分が主であろう。

（文責　K）

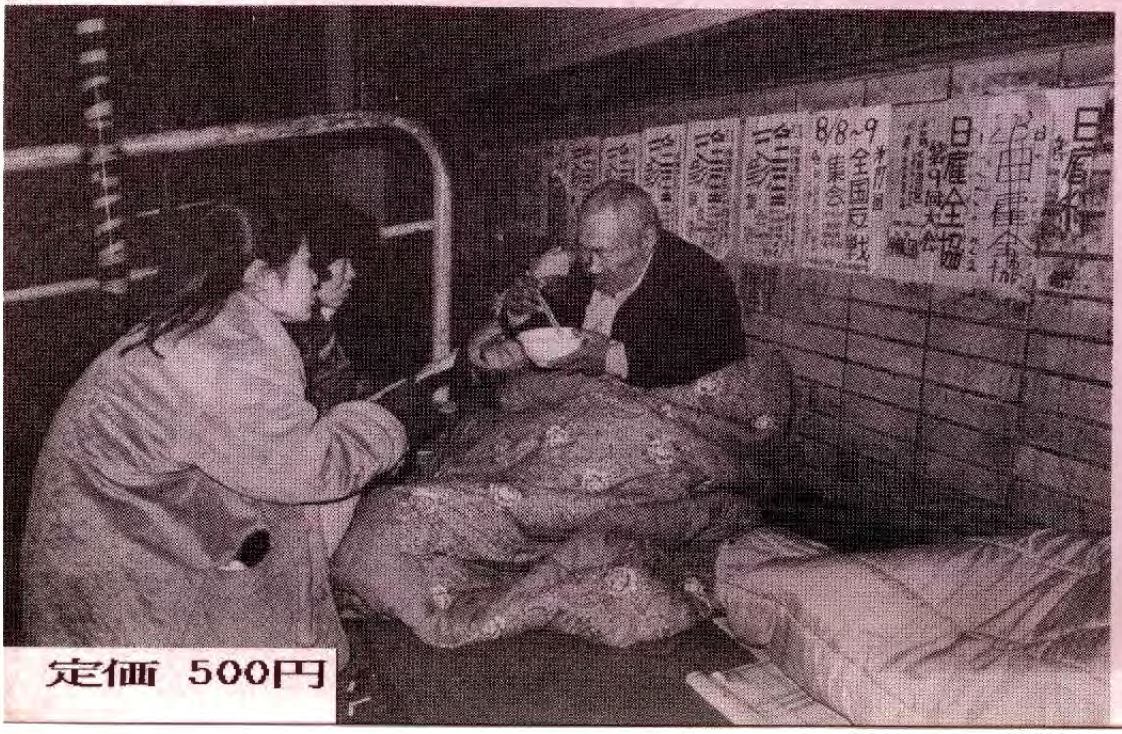
おわりに

「92-93越冬人パト報告集」がようやく完成した。当初は、いっそのことこの間「会館人パト班」のメンバー各自が書きためてきた人パトの報告レジュメのいっさいがっさいを――92.12月から93.3月までの越冬人パトの記録に加え、92・1年間をとおして毎週欠かさず取り組んできた山谷・上野人パトの記録、そして労働者からのききとり録――をこの報告集に収録する予定だったのだが、残念ながら予算の関係で断念せざるをえなかった。がそれらの記録は、すべて会館・医療室に資料として保存されている。会館をおとずれたときにでもぜひ目をとおしていただきたい。

この報告集はあくまで報告集である。つまりわたしたちが取り組んできた人パトをわたしたちの力で総括し、評価をくだし、次の人パト、そして山谷のたたかいを展望するといった基本的なことすら十全にできていない、そんな限界にみちたものである。逆にいえば、だからこそ報告集としておおやけにし、多くの仲間の指摘、批判をあおぎたいとかんがえている。そのいっぽう、この報告集のなかで、人パトをとおしてみえてきた都下の寄せ場の現実、それもその一面ぐらいは提示しえたという自負ももっている。報告集をよみ、あらたに人パトへ、そして山谷のたたかいにかかわってくる仲間がいれば、それはわたしたちにとって大きな成果である。

山谷・上野人パトは毎週土曜日夜8時、会館まえから出発する。わたしたちは毎週、「きょうの人パトでなにかひとつでも、いままでしらなかった、わからなかった山谷を発見してやるんだ」といった気がまえでのぞんでいる。わたしたちは人パトのなかで、まずは「生きた寄せ場」にせまりたいとおもっている。山谷・上野人パトへともに参加を！（毎度のことながら、毛布、衣類などのカンパもよろしく）

（文責・N）



定価 500円